

松ヶ谷遺跡

—農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業松山南部地区農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2003

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

まつがたに 松ヶ谷遺跡

—農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業松山南部地区農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—



2003

松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター

序

石鎚山系に源を発し、松山平野の南部を西流する重信川、その支流となる御坂川下流域の肥沃な農耕地に久谷地区は広がります。

調査地周辺の御坂川と砥部川に挟まれた大友山からのびる丘陵上には、弥生時代の高地性遺跡である糸瀬面山遺跡、古墳時代の横穴式石室構造をもつ松ヶ谷古墳や古鎌山古墳群、丘陵裾部には西野大池窯跡群や古鎌山窯跡群の須恵器窯、平野部には市指定史跡「八ツ塚古墳群」などの群集古墳、中世になると県指定史跡「荏原城跡」をはじめとした戦国武将の居館など、丘陵部から平野部にかけて遺跡の密集する地域であります。

松ヶ谷遺跡は丘陵上に立地し、松山平野の東部から西部一帯、遠くには伊予灘を一望できます。発掘調査では、この眺望豊かな丘陵上に築かれた弥生時代後期の堅穴式住居址やそれに伴う遺構が見つかり、住居址内からは、弥生土器や石器など当時の生活が窺える遺物も出土しました。特に、この遺跡は立地から察して、弥生時代の中頃から瀬戸内海沿岸地域で急激に増加する高地性遺跡であり、『魏志』の「倭人伝」に記される倭国大乱に伴う軍事的な様相或いは、山へ生活の依存を高めた様相など、調査例の少ない高地性遺跡研究における貴重な資料を得ることができました。

こうした成果をあげることができましたのも、関係各位の埋蔵文化財行政に対する深いご理解とご協力の賜であり、厚く感謝申し上げます。

本書が、埋蔵文化財の調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、生涯教育の向上に寄与できることを願っております。

平成15年3月7日

財団法人松山市生涯学習振興財團
理事長 中村時広

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会・財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが平成12年10月～同年12月に松山市恵原町内において愛媛県松山地方局産業経済部第2土地改良課の「農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業松山南部地区農道工事」に伴い実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺構は呼称を略号で記述した。堅穴式住居址：S B、溝：S D、土坑：S K、柱穴：S Pとした。
3. 遺物の実測・製図及び遺構の製図は、担当調査員の指示のもと、宮脇和人、猪野美喜子、安井山起美が行った。
4. 遺物の実測図は、土製品を1/4・1/3、石製品については1/4・1/3・2/3を基本とした。
5. 遺構図や遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
6. 本書に使用した方位は真北である。
7. 本書にかかる遺物・記録類は、松山市埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。
8. 遺物の撮影及び写真図版の作成は大西朋子が行った。
9. 屋外調査においては、森光晴氏から御指導と御教示を賜った。記して感謝申し上げます。
10. 本書の執筆は、河野史知、加島次郎が分担執筆し、編集は河野史知が行った。なお、編集と校正は、梅木謙一、水口あをい、猪野美喜子、安井山起美の協力を得た。
11. 製版　白黒図版－133線
印刷　オフセット印刷
用紙　本文－マットカラー－110kg
　　白黒写真図版－マットカラー－135kg
製本　アジロ綴じ

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯 2. 調査・刊行組織	
第2章 遺跡の環境	3
1. 遺跡の立地 2. 歴史的環境	
第3章 試掘調査	6
1. 経過 2. 調査 3. 調査の結果	
第4章 調査の概要	15
1. 調査の経過 2. 層位	
第5章 A区の調査	23
1. 検出遺構 2. 第IV層出土遺物	
第6章 B区の調査	25
1. 検出遺構 2. 出土遺物	
第7章 調査の成果と課題	35
1. 上層 2. 遺構 3. 松ヶ谷古墳群内で確認した石室 4. 西野町試掘調査の出土遺物 5. 西野古墳群内の採取遺物 6.まとめ	

挿 図 目 次

第1図	松山平野の地形分類図（縮尺1/200,000）	3
第2図	周辺の遺跡分布図（縮尺1/25,000）	5
第3図	調査地位置図（1）（縮尺1/5,000）	7
第4図	調査地位置図（2）（縮尺1/600）	8
第5図	トレンチ配置図（縮尺1/400）	9
第6図	トレンチ柱状図（1）（縮尺1/40）	12
第7図	トレンチ柱状図（2）（縮尺1/40）	13
第8図	トレンチ柱状図（3）（縮尺1/40）	14
第9図	調査地位置図（縮尺1/800）	15
第10図	調査地区割図（縮尺1/500）	16
第11図	A区土層図（縮尺1/50）	17
第12図	B区上層図（縮尺1/50）	19
第13図	A・B区造構配置図（縮尺1/100）	21
第14図	A区 S D 1測量図（縮尺1/80）	23
第15図	第IV層出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）	24
第16図	S B 1測量図（1）（縮尺1/50）	25
第17図	S B 1測量図（2）（縮尺1/60）	26
第18図	S B 1出土遺物実測図（縮尺1/4・1/3）	27
第19図	S K 1測量図（縮尺1/20）	28
第20図	S K 2測量図（縮尺1/20）	28
第21図	S K 3測量図（縮尺1/20）	29
第22図	S K 4測量図（縮尺1/20）	29
第23図	S K 5測量図（縮尺1/20）	30
第24図	S K 6測量図（縮尺1/20）	30
第25図	S P 1測量図（縮尺1/20）	31
第26図	第IV層出土遺物実測図（縮尺1/4・2/3）	31
第27図	第I層出土遺物実測図（縮尺1/4）	31
第28図	表採遺物実測図（縮尺1/3）	32
第29図	位置図（1）（縮尺1/3,000）	36
第30図	位置図（2）（縮尺1/200）	37
第31図	B地点現況図（縮尺1/60）	38
第32図	C地点現況図（縮尺1/30）	39
第33図	トレンチ配置図（縮尺1/500）	40
第34図	T 5～T 8上層断面図（縮尺1/80）	41
第35図	第9層出土遺物実測図（縮尺1/4）	42
第36図	位置図（縮尺1/7,000）	44

第37図	採取遺物実測図（1）（縮尺1/3）	46
第38図	採取遺物実測図（2）（縮尺1/3）	47

表 目 次

表1	竪穴式住居址一覧	33
表2	溝一覧	33
表3	土坑一覧	33
表4	A区第IV層出土遺物観察表（石製品）	33
表5	B区SB1出土遺物観察表（土製品）	33
表6	B区SB1出土遺物観察表（石製品）	34
表7	B区第IV層出土遺物観察表（土製品）	34
表8	B区第IV層出土遺物観察表（石製品）	34
表9	第I層出土遺物観察表（土製品）	34
表10	表探出土遺物観察表（石製品）	34
表11	第9層出土遺物観察表（土製品）	43
表12	採取遺物観察表（土製品）	48

写 真 図 版 目 次

図版1. 1	調査地遠景（北東より）
2	調査地全景（南より）
図版2. 1	調査地全景（北より）
2	作業状況（北より）
図版3. 1	A区遺構検出状況（南より）
2	A区遺構検出状況（北より）
図版4. 1	A区SD1南壁土層（北より）
2	A区台石出土状況（東より）
図版5. 1	A区遺構完掘状況（北より）
2	A区遺構完掘状況（南より）
図版6. 1	B区遺構検出状況（南より）
2	B区SK4検出状況（東より）
図版7. 1	B区SK1・6検出状況（東より）
2	B区SB1検出状況（西より）

- 図版8. 1 B区SB1ベルト上層（北より）
2 B区SB1焼土・炭検出状況（北西より）
- 図版9. 1 B区SB1遺物出土状況（東より）
2 B区SB1完掘状況（西より）
- 図版10. 1 B区SB1完掘状況（東より）
2 調査地全景（東より）
- 図版11. 1 A区第IV層出土遺物
2 B区第IV層出土遺物
3 B区第I層出土遺物
- 図版12. 1 B区SB1出土遺物
- 図版13. 1 松ヶ谷古墳群の遠景（北西より）
2 松ヶ谷古墳群内A地点の石（北より）
- 図版14. 1 松ヶ谷古墳群内A地点の石（北西より）
2 松ヶ谷古墳群内B地点の石（南西より）
- 図版15. 1 松ヶ谷古墳群内C地点の石（北より）
2 松ヶ谷古墳群内C地点の石（南西より）
- 図版16. 1 須恵器の採取地（北東より）
2 表採遺物（東より）

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

2000（平成12）年3月、愛媛県松山地方局産業経済部第2土地改良課（以下、松山地方局）より、松山市志原町乙190外における「農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業松山南部地区農道工事」にあたり、当該地における埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No.140 松ヶ谷古墳群、松ヶ谷遺物包含地」内にあり、周知の遺跡として知られている。申請地の北西1.2kmには西野Ⅲ遺跡があり、弥生時代前期の土壙墓、弥生時代中期の竪穴式住居址や掘立柱建物址、多数の土壙墓が確認されている。西野Ⅲ遺跡の西150mにある糞迦面山遺跡では、丘陵頂上部に弥生時代中・後期の竪穴式住居址5棟と倉庫跡1棟が検出され、集落が形成されている。西1.3kmには横穴式石室構造をもつ大下田古墳群。北0.7kmには八ツ塚古墳群が分布する。また、西1kmの古鎌山一帯には、谷田窯跡群、古鎌山窯跡群、通谷窯跡群、西野大池窯跡群などがあり、6世紀中葉から7世紀初頭にかけての窯跡が11基ある。北約100mの丘陵尾根部には松ヶ谷古墳があり、同古墳からは後期の横穴式石室を検出し、石室内からは多数の須恵器を主体とした土器が出土している。このように申請地一帯には、多数の遺跡が存在する。

のことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認する必要があるため、2000（平成12）年4月17日～5月31日に財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は試掘調査を実施した。試掘調査は、調査地内の尾根部を中心にしてT1～T16の計16本トレンチを設定し、古墳や集落の確認と堆積土層の確認を行った。

試掘調査の結果、T1～T4からは溝状遺構1条、T10・T12～T14からは土坑状遺構数基、炭・焼土を検出し、弥生土器・石器等が出土した。

これらの結果を受け、文化教育課・埋文センターと松山地方局は遺跡の取り扱いについて協議を行い、開発工事によって消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代における高地性遺跡の構造解明を調査の主目的とし、文化教育課の指導のもと、埋文センターが主体となり、2000（平成12）年10月10日より本格調査を実施した。

なお、本格調査は溝状遺構を検出した範囲をA区とし、土坑状遺構と炭・焼土を検出した範囲をB区と称した。

2. 調査・刊行組織

調査地 松山市忠原町乙190・191・192・197番地
 遺跡名 松ヶ谷遺跡
 調査期間 平成12年10月10日～同年12月8日
 調査面積 4,623m²のうち1,036m²
 調査委託 愛媛県松山地方局産業経済部第2土地改良課

【調査組織】(平成12年度)

松 山 市 教 育 委 員 会	教 育 長	中 矢 陽 三
事 務 局	長 長	園 上 和 敬
	局 長 付 參 事	森 脇 將
	次 長	赤 里 忠 男
文 化 教 育 課	長 長	馬 場 洋
附松山市生涯学習振興財団	理 事 長	中 村 時 広
	事 務 局 長	二 宮 正 昌
	事 務 局 次 長	江 戸 孝
	事 勿 局 次 長	森 和 朋
埋蔵文化財センター	所 長	中 川 隆
	専 門 監 督	野 本 力
	調 査 係 長	田 城 武 志
	調 査 主 任	栗 田 正 芳 (文化教育課職員)
	調 査 員	河 野 史 知
		加 島 次 郎

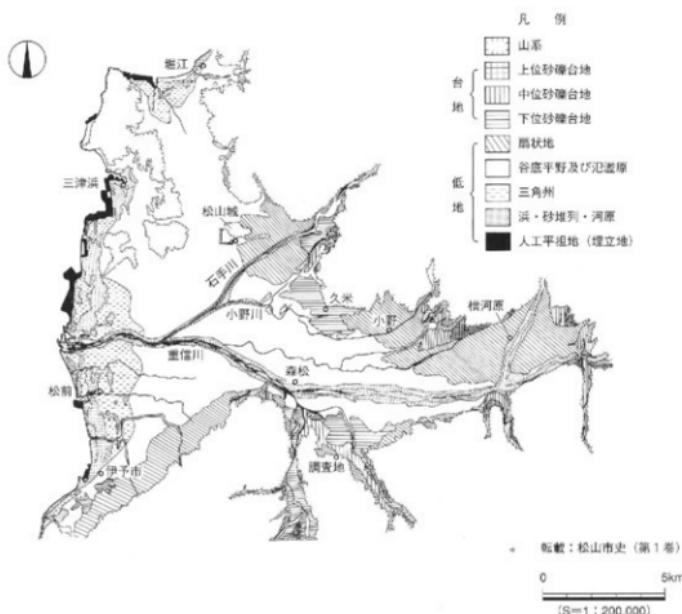
【刊行組織】(平成14年度) (平成15年3月7日現在)

松 山 市 教 育 委 員 会	教 育 長	中 矢 陽 三
事 勿 局	長 長	武 井 正 浩
	企 画 官 官	川 口 雄 修
文 化 財 課	課 長	石 丸 馬 場 洋
	主 任	八 木 方 人
	副 事 長	田 城 武 志
附松山市生涯学習振興財団	理 事 長	中 村 時 広
	事 勿 局 長	三 宅 泰 生
	事 勿 局 次 長	肯 見
	事 勉 局 次 長	森 和 朋
埋蔵文化財センター	所 長	中 川 隆
	専 門 監 督	野 本 力
	次 長 及 調 査 係 長	西 尾 幸 則
	調 査 員	河 野 史 知
		加 島 次 郎
		大 西 朋 子

第2章 遺跡の環境

1. 遺跡の立地（第1図）

本遺跡は、松山平野南部を西流する重信川の左岸約3kmに位置しており、松山市と砥部町の境付近にある。本遺跡の南約3km付近に、大断層である中央構造線が四国の北部をほぼ東西方向に走っており、それを境にして南の南西日本外帯（太平洋側）と、北の南西日本内帯（アジア大陸側）に区分される。南西日本外帯は安山岩や結晶片岩類などの火山性の岩石で構成されており、南西日本内帯は砂岩と頁岩の互層である和泉層群で構成される。本遺跡は、この南西日本内帯上の丘陵尾根部の標高130m前後に立地している。



第1図 松山平野の地形分類図

2. 歴史的環境（第2回）

調査地周辺の砥部川や御坂川下流は県内でも屈指の遺跡の密集する地域で、愛媛県立総合運動公園、とべ動物園の建設や、大規模な住宅開発、道路建設に伴う発掘調査により、多くの成果を得ている。

〔1〕旧石器時代

洪積世の段丘上にある土壇原V遺跡から、国府型ナイフ形石器が出土している。

〔2〕縄文時代

早期の土壇原II遺跡では、方形の堅穴式住居址内から無文土器が出上する。上野遺跡は前期と後期の重複遺跡で、北西の低丘陵上の谷田II遺跡では、後期の堅穴式住居や貯蔵穴とみられる土坑を検出している。北西方の砥部川左岸河岸段丘上の長山遺跡でも上壠群を検出している。これらのことから、縄文時代を通じて集落の存在が窺える。

〔3〕弥生時代

前期の集落跡は未検出であるが、墳墓は多く検出されており、西野III遺跡は土塙墓群を中心とした大規模な墓域が形成され、卑制を考える上で貴重な資料が検出されている。中期になると、西野I・II・III遺跡、积迦面山遺跡・谷田III・IV遺跡などの集落が高位の河岸段丘上で営まれる。後期になると集落は、中位から低位にかけての河岸段丘上にも広がりをみせる。なかでも、北西方に展開する土壇原遺跡群では、土壇原XII（土壇原南）遺跡は堅穴式住居址や掘立柱建物址で構成される大規模な集落で、土壇原VI（土壇原北）遺跡は土壇墓群を主体となす墓域である。

〔4〕古墳時代

前期から中期の集落跡は不明であるが、後期には高尾田遺跡・水満田・三角・麻生小学校南遺跡から堅穴式住居址や掘立柱建物址などの集落跡がみられる。古墳は前期のものは不明であり、中期には、低位の河岸段丘上に、振文鏡が出土した三角1号墳、削竹形木棺や箱式石棺などを主体部にもつ土壇原I遺跡、円筒埴輪棺の土壇原V遺跡などがある。後期になると丘陵上、丘陵裾部、河岸段丘上に古墳は分布し、砥部川の左岸や右岸、御坂川流域などに古墳が密集しており、积迦面山古墳群・天下田古墳群・古錦山古墳群・土壇原古墳群・八ツ塚古墳群・松ヶ谷古墳群がある。

松山市と砥部町の隣接部には、砥部古窯跡群があり、6世紀中葉から7世紀にかけての大窯業地域である。砥部川右岸の高位段丘上や低丘陵裾部では、18基の須恵器窯が確認されている。なかでも谷田1～5号窯跡と通谷池1・2号窯跡は埴輪併用窯である。また、谷田1号窯や西野春日谷遺跡では窯跡と住居跡など、工人集団との関わりをもつ遺構を検出している。

〔5〕古代

ひきつづき窯が形成される。砥部川右岸の通谷池4号窯跡、千足1号窯跡は8世紀前半である。

〔6〕中世

城跡が多く分布しており、県指定史跡の荏原城を中心にして、荏原城の南西約1.6kmの山頂に大友城、南0.7kmには本陣城としての新張城があり、東2.8kmの尉の城はその山城で狼煙遺構がある。北西1.3kmの上野城は河岸段丘と舌状の丘陵台地の隅部を利用して造られた方形館跡である。荏原城は方形館跡で周間に郭外に濠を巡らし、濠の土砂をかき揚げた土塁を築いている。

〔7〕近世

隣接する砥部町内では、江戸時代中期からの創業である「砥部焼き」が盛んで、現在も多数の窯がある。



第2図 周辺の遺跡分布図

第3章 試掘調査

1. 経過 (第3～5図)

平成12年4月～5月に財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが試掘調査を行った。試掘調査は、調査地内に16本のトレンチを設定し、遺構や遺物の有無を確認した。

平成12年4月24日、調査区16ヶ所を設定し、T1～T16まで順次調査を開始する。

本日より現場作業を開始する。調査地の伐採・草刈り後の木や草の除去作業を行う。4月27日、南北にトレンチを設定し、トレンチ掘りを人力にて開始する。5月17日、トレンチ掘りに並行して、測量作業を開始する。5月18日、南北トレンチ掘りを終了する。東西トレンチを設定し、北側からトレンチ掘りを開始する。5月23日、トレンチ掘りを終了する。5月21日、トレンチの完掘状況の写真撮影を行う。調査地谷部の積石部分の検出作業を開始する。5月25日、積石部分の写真撮影を行う。5月31日、測量が終了し、調査を完了する。

2. 調査

(1) 土層 (第6～8図)

T1～T16の検出土層は、1～9層に分層した。1層茶褐色土、2層明黄褐色土、3層黄褐色土、4層黄色土、5層明灰黄色土、6層褐灰色土、7層灰白色土、8層黄橙色土、9層明黄色土となる。

1層：表土で厚さ11～30cmを測る。調査区全域で検出する。

2層：1cm大の礫を含む明灰褐色土で、厚さ4～60cmを測る。調査区の北端を除く尾根部付近にあり、B～G・I～O・Q～T・Z・Cで検出する。

3層：黄褐色土で、厚さ9～99cmを測る。調査区の北端を除く尾根部付近にあり、A・D・E・N～Q・S～X・a～c地点で検出する。

4層：黄色土で、厚さ8～50cmを測る。調査区の北端を除く尾根部にあり、M～R・T・X・Y・a・bで検出する。

5層：明灰黄色土に2～3cm大の礫を多含し、厚さ34～77cmを測る。なお、この土層は、本格調査の結果、SD1の埋土になった。

6層：褐灰色土で、厚さ7～28cmを測る。調査区の南端を除く尾根部にあり、M～R地点で検出する。

7層：灰白色土に3～4cm大の礫を多含し、厚さ15～28cmを測る。調査区の南端を除く尾根部にあり、O・Q地点で検出する。

8層：弥生土器を包含し、厚さ4～22cmを測る。調査区北側の尾根部の比較的平坦地のT10・T12～T14で部分的に検出する。

9層：明黄色土の地山であり、調査区の南北端は岩盤となる。

調査



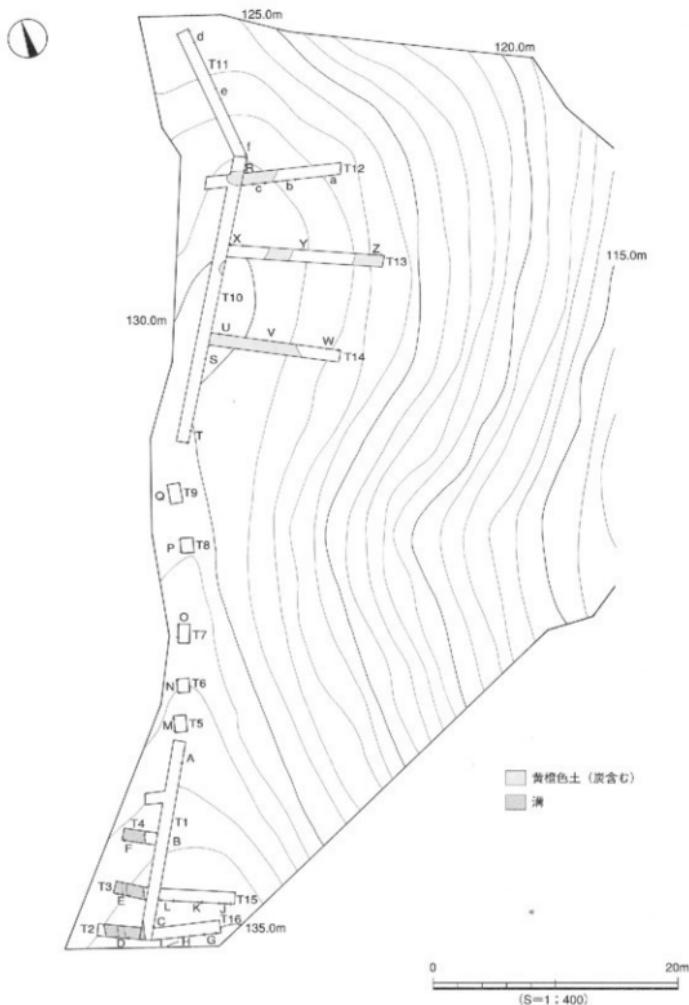
第3図 調査地位置図(1)

(S=1:5,000)

試掘調査



第4図 調査地位置図(2)



第5図 トレンチ配置図

(2) トレンチ調査

T 1 (第6図・A~C)

調査区南端の尾根部に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ16.8m、深さ12~45cm、高低差3.24mを測る。検出土層は1層表土、2層明黄褐色土、3層黄褐色土、9層岩盤の地山である。遺構は9層上面にてSD 1の肩部を検出した。遺物はない。

T 2 (第6図・D)

調査区南端の西側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ3.6m、深さ46~143cm、高低差0.68mを測る。検出土層は1層表土、2層明黄褐色土、3層黄褐色土、9層岩盤の地山である。遺構は9層上面にてSD 1を検出した。遺物はない。

T 3 (第6図・E)

調査区南側の西側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ2.8m、深さ28~105cm、高低差0.98mを測る。検出土層は1層表土、2層明黄褐色土、3層黄褐色土、9層岩盤の地山である。遺構は9層上面にてSD 1を検出した。遺物はない。

T 4 (第6図・F)

調査区南側の西側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ2.8m、深さ18~73cm、高低差0.81mを測る。検出土層は1層表土、2層明黄褐色土、9層岩盤の地山である。遺構は9層上面にてSD 1を検出した。遺物はない。

T 5 (第7図・M)

調査区南側の尾根部に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ1.4m、深さ1.12m、高低差0.08mを測る。検出土層は1層表土、2層明黄褐色土、4層黃色土、6層褐灰色土、9層地山である。遺構と遺物はない。

T 6 (第7図・N)

調査区南側の尾根部に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ1.2m、深さ1.53m、高低差0.01mを測る。検出土層は1層表土、2層明黄褐色土、3層黃褐色土、4層黃色土、6層褐灰色土、9層地山である。遺構と遺物はない。

T 7 (第7図・O)

調査区中央の尾根部に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ1.6m、深さ1.69m、高低差0.17mを測る。検出土層は1層表土、2層明黄褐色土、3層黃褐色土、4層黃色土、6層褐灰色土、7層灰白色土、9層地山である。遺構と遺物はない。

T 8 (第7図・P)

調査区中央の尾根部に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ1.2m、深さ1.72m、高低差0.09mを測る。検出土層は1層表土、3層黃褐色土、4層黃色土、6層褐灰色土、9層地山である。遺構と遺物はない。

T 9 (第7図・Q)

調査区中央の尾根部に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ1.7m、深さ1.27m、高低差0.02mを測る。検出土層は1層表土、2層明黄褐色土、3層黃褐色土、4層黃色土、6層褐灰色土、7層灰白色土、9層地山である。遺構と遺物はない。

T10（第7図・R～T）

調査区中央から北側の尾根部にかけて設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ24.0m、深さ8～90cm、高低差1.58mを測る。検出土層は1層表土、2層明黄褐色土、3層黄褐色土、4層黄色土、6層褐色灰色土、9層地山である。トレンチ中央部で土坑、北端で焼土層を検出する。遺物はない。

T11（第8図・d～f）

調査区北側の東側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ11.6m、深さ7～50cm、高低差2.31mを測る。検出土層は1層表土、9層岩盤の地山である。遺構と遺物はない。

T12（第8図・a～c）

調査区北側の東側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ8.2m、深さ27～65cm、高低差1.28mを測る。検出土層は1層表土、2層明黄褐色土、3層黄褐色土、4層黄色土、8層黄橙色土、9層地山である。トレンチ西側（c）の9層上面に炭が混じる焼土層を検出し、第8層中から弥生土器片・石器が出土した。

T13（第8図・X～Z）

調査区北側の東側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ12.9m、深さ13～42cm、高低差2.82mを測る。検出土層は1層表土、2層明黄褐色土、3層黄褐色土、4層黄色土、8層黄橙色土、9層地山である。9層上面で8層が埋土の土坑状遺構を検出する。

T14（第8図・U～W）

調査区北側の東側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ10.8m、深さ12～37cm、高低差2.18mを測る。検出土層は1層表土、3層黄褐色土、8層黄橙色土、9層地山である。

T15（第6図・J～L）

調査区南側の東側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ6.2m、深さ20～40cm、高低差1.21mを測る。検出土層は1層表土、2層明黄褐色土、9層岩盤の地山である。遺構と遺物はない。

T16（第6図・G～I）

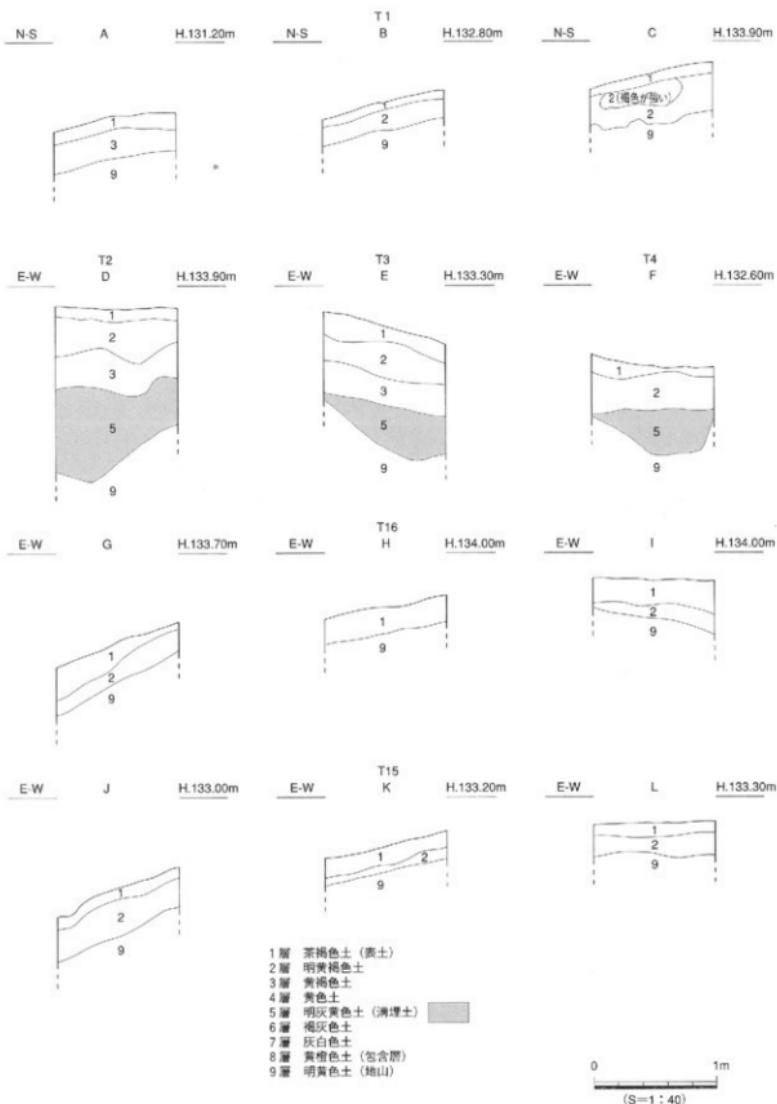
調査区南端の東側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅1m、長さ5.7m、深さ22～43cm、高低差1.19mを測る。検出土層は1層表土、2層明黄褐色土、9層岩盤の地山である。遺構と遺物はない。

3. 調査の結果

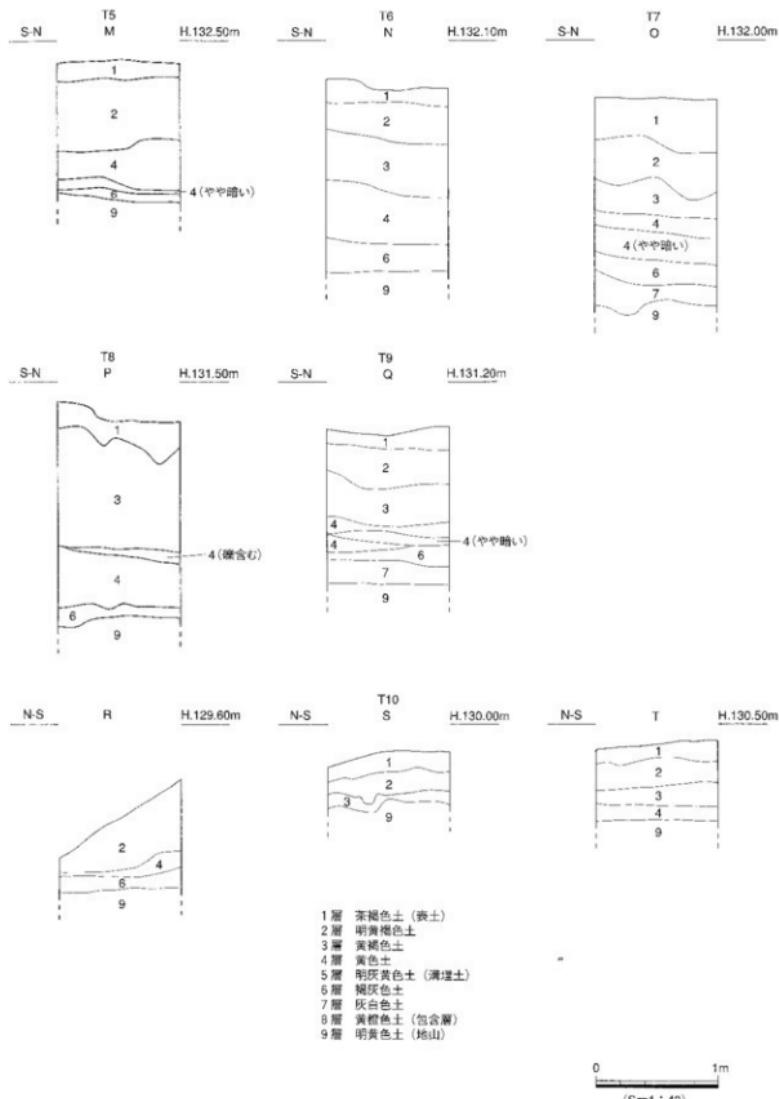
試掘調査の結果、T1～T4から尾根に沿う様に断面形状がV字状を呈した溝を検出した。また、T10・T13から土坑を検出し、T10・T12から焼土層や石器を検出し、T14から弥生土器が出土する遺物包含層を検出した。したがって、調査区南端のT1～T4付近と北側のT10～T14付近の2ヶ所を本格調査の対象地とした。

また、対象地の裾部で検出した積石1は人頭大の円礫で、果樹園の裾部の土止めの積石である。積石2は上止め用の予備として置いているものと考えられるが、積石1と積石2は石の形状や材質が比較的揃っていることから、間壁に伴い壊された古墳の石室の石であった可能性も考えられる。

試 挖 調 査

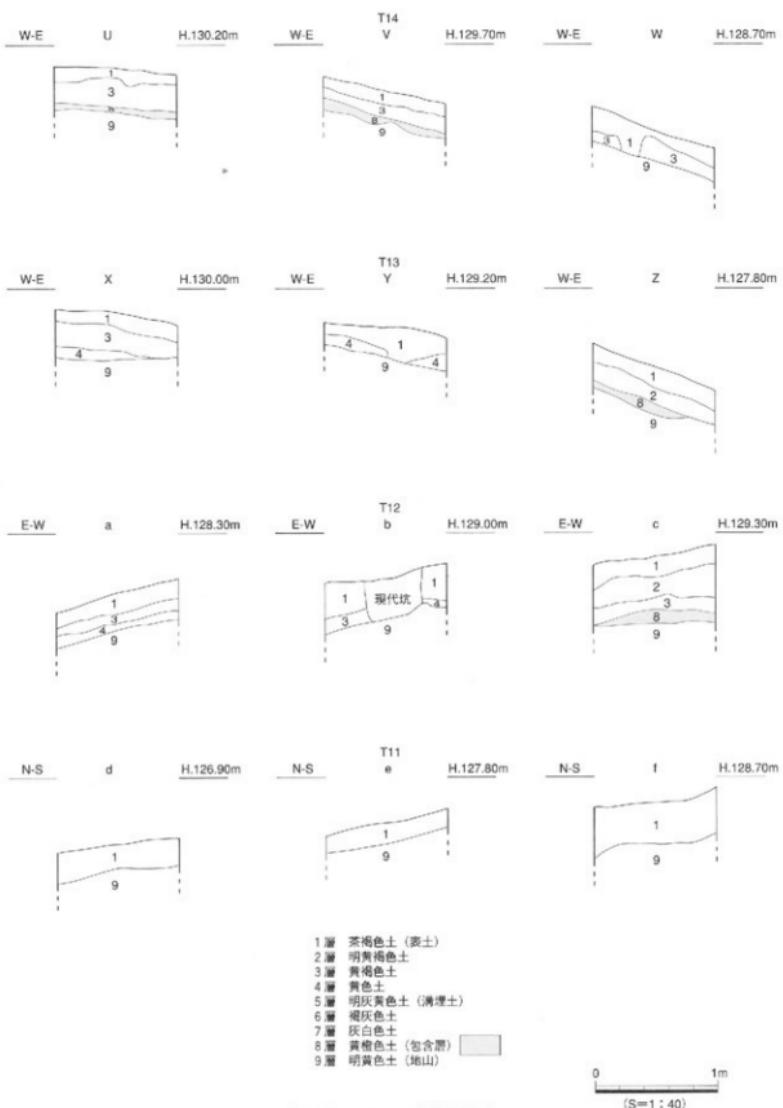


第6図 トレンチ柱状図 (1)



第7図 トレンチ柱状図(2)

試 挖 調 查

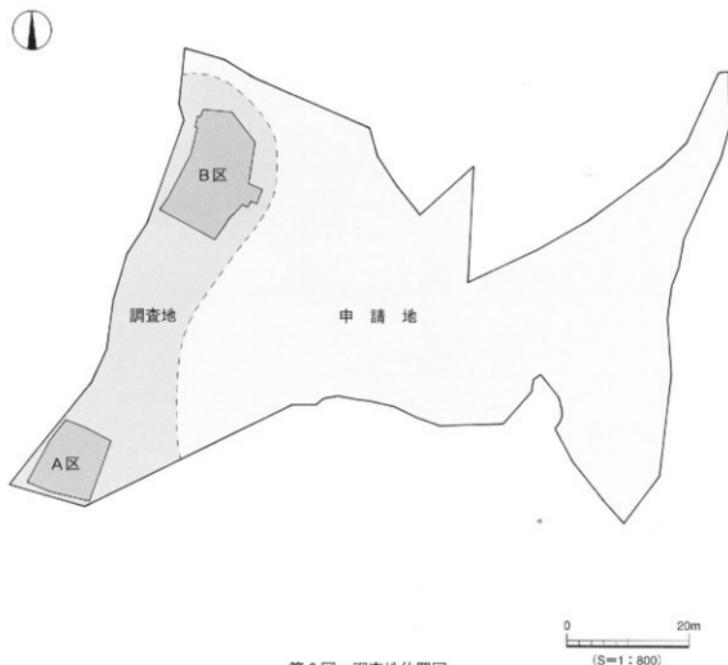


第 8 図 トレンチ柱状図 (3)

第4章 調査の概要

1. 調査の経過（第9図）

平成12年10月10日、調査地の草刈りを開始する。10月13日、調査区を設定し、A区の表土層の掘り下げを人力にて開始する。10月16日、B区の表土層の掘り下げを開始する。10月26日、B区の遺構検出作業を開始する。10月30日、A区の遺構検出作業を開始する。11月7日、A区とB区の遺構検出写真撮影を行う。同日、A区のSD1とB区の現代坑の掘り下げを開始する。11月10日、現代坑の半掘を終了し、完掘作業を開始する。11月21日、A区SD1の掘り下げを終了する。11月22日、B区の土坑とSB1の掘り下げを開始する。12月4日、B区SB1の炭・焼土を取り上げる。12月5日、B区の土坑とSB1の掘り下げを終了する。12月7日、A・B区の遺構完掘写真撮影を行う。12月8日、図面測量が終了し、本日をもって現場作業を終了する。平成13年3月24日、地元の方や一般の市民を対象とした現地説明会を行い、約100名の見学者が訪れる。



第9図 調査地位置図

調査の概要

2. 層位 (第11・12図)

調査地は南から北へ延びる尾根上に位置し、全長75mで南から北へ向けて8mの比高差を測る。基本土層は第Ⅰ層茶褐色土、第Ⅱ層褐色土～灰褐色土、第Ⅲ層黄褐色土、第Ⅳ層黄橙色土、第Ⅴ層明黄色土である。

第Ⅰ層 表土でA・B区全域に堆積し、厚さ11～30cmを測る。

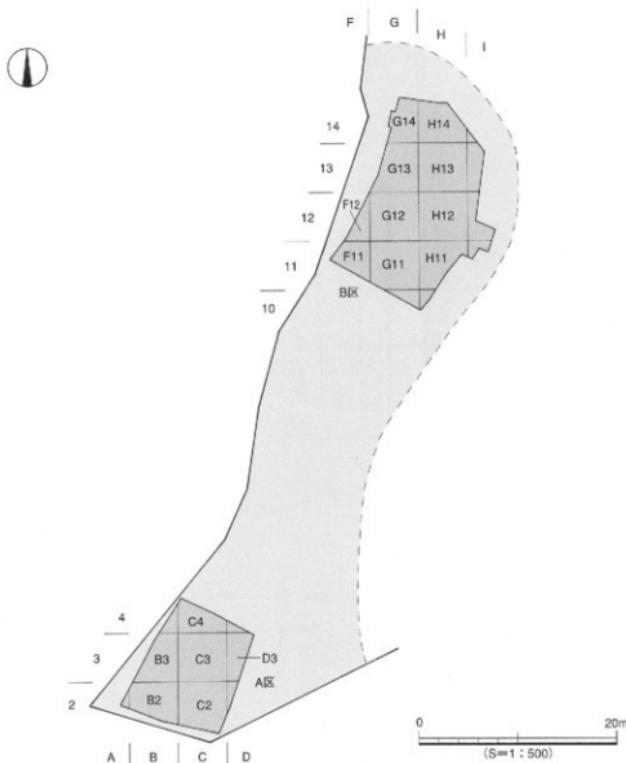
第Ⅱ層 A・B区の全域に堆積し、厚さ13～32cmを測る。

第Ⅲ層 B区の南側に堆積し、厚さ11～41cmを測る。

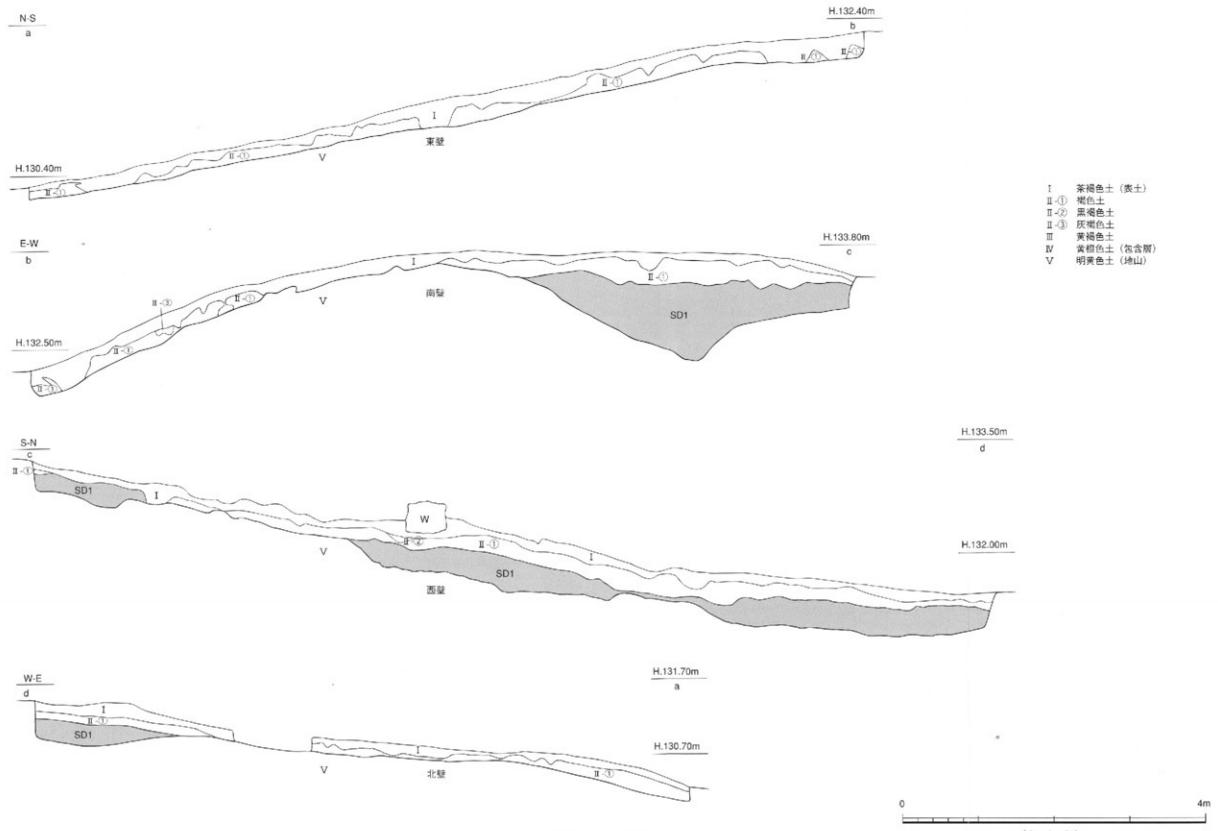
第Ⅳ層 B区の南側を中心に薄く堆積しており、弥生土器を包含する。厚さ10～32cmを測る。

第Ⅴ層 地山で遺構検出面となり、A区全域とB区北側では岩盤となる。

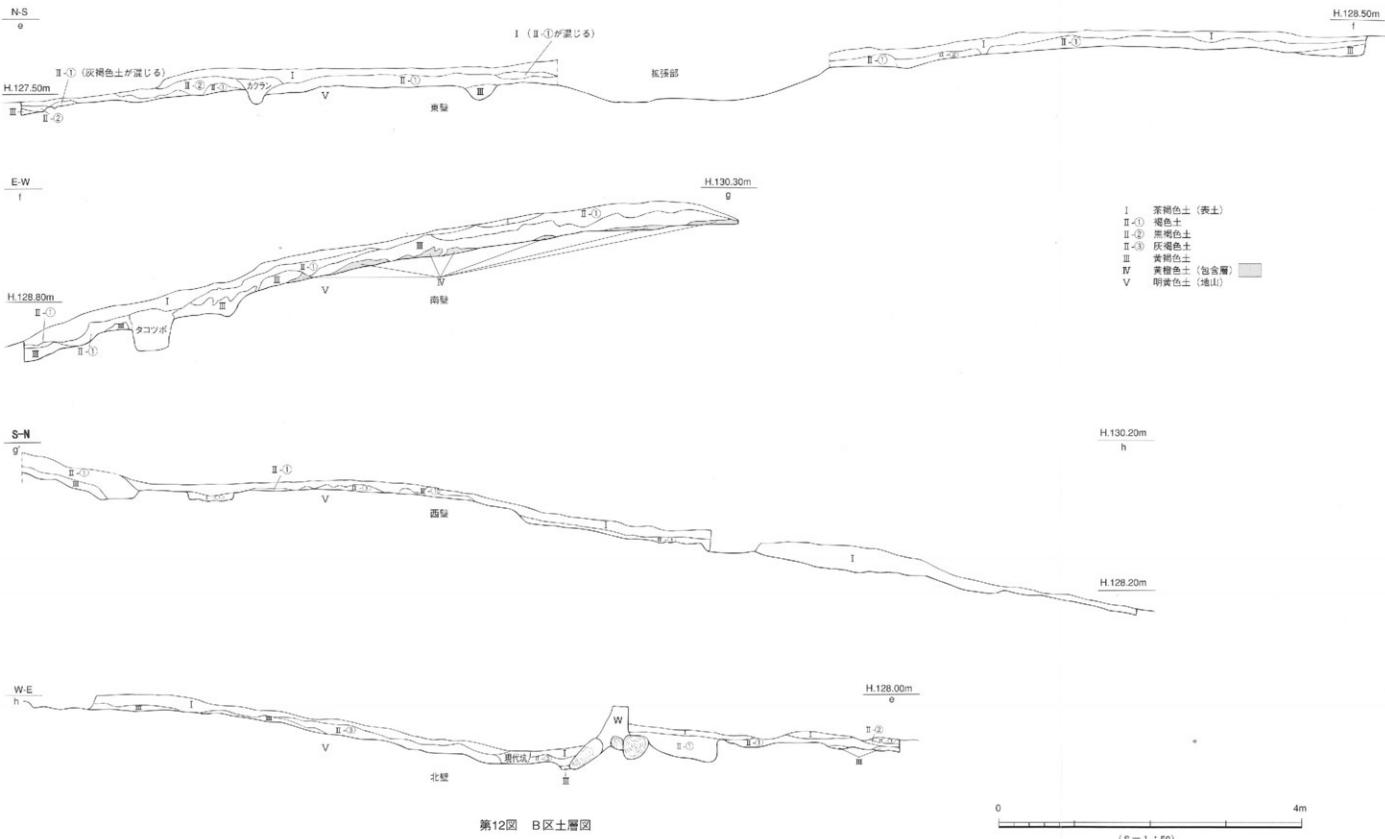
なお、調査区は5m四方のグリットを設定し調査を行った。(第10図)



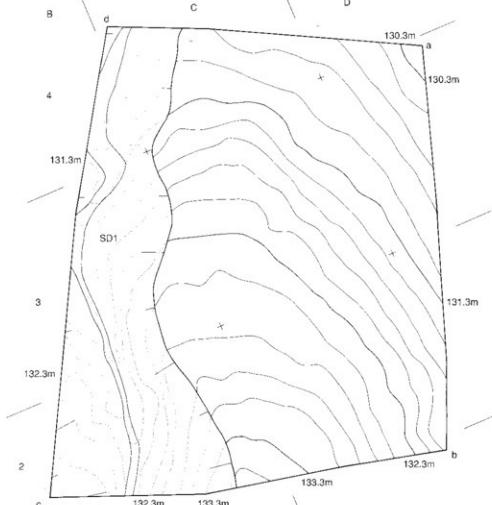
第10図 調査地区割図



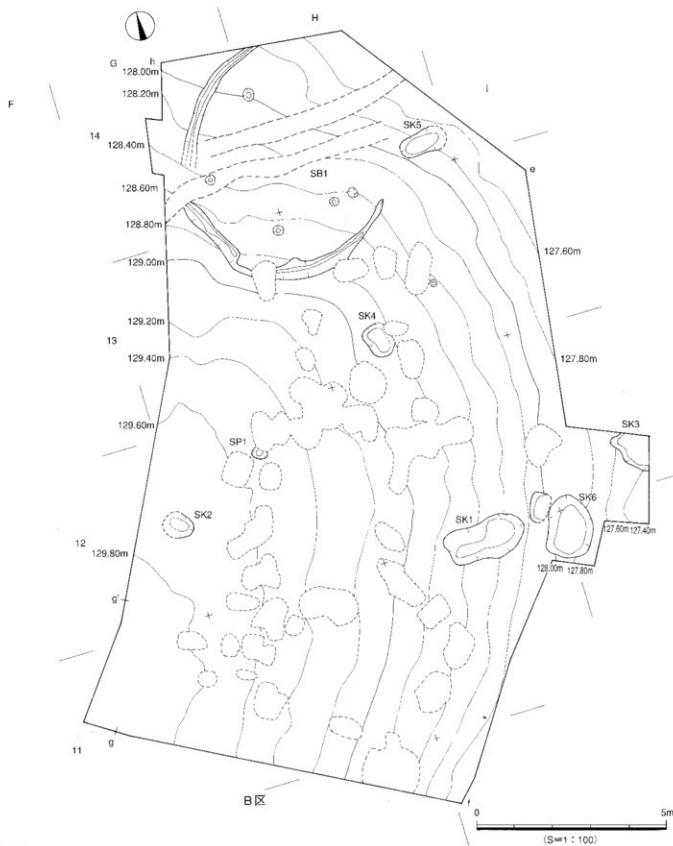
第11図 A区土層図



第12図 B区土層図



A区



第13図 A・B区造構配図

第5章 A区の調査

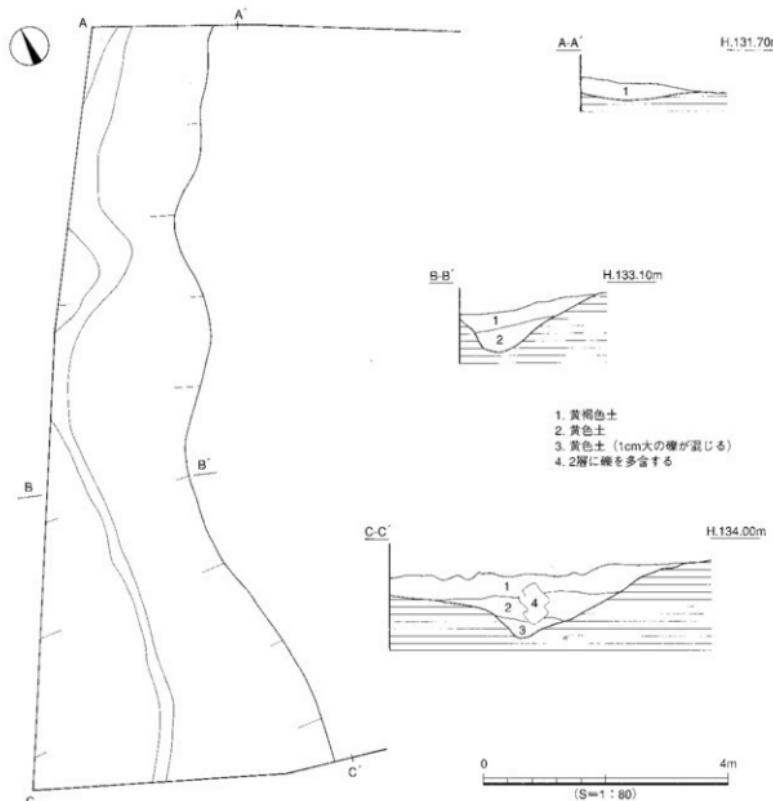
1. 検出遺構（第13図）

第V層上面にて溝1条を検出した。

(1) 溝

S D 1 (第14図)

調査区西側のA2・B2～B4・C4区に位置し、溝の南・北側や、溝の西側の上端部は調査区外に延びる。主軸は尾根に沿う様に南北方向を指向する。南側は直線的に南北方向をなし、北側はやや北東方向に振れる。規模は検出長12.5m、上場幅5m以上、深さ0.5～1mを測り、南側に比べ北側は溝床が浅くなり、溝床は南から北へ1.5mの比高差を測る。断面形態は南側がV字状、北側はレンズ状



第14図 A区SD1測量図

A区の調査

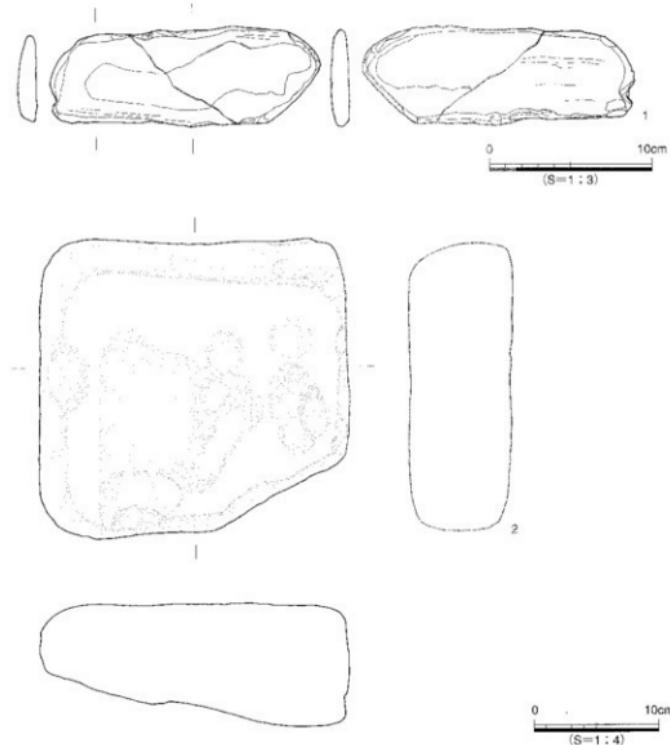
を呈し、堆土は上層が黄褐色土、中層が黄色土、下層が黄色土（1cm大の礫が混じる）であるが、上層から下層にかけて厚さ70cm、範囲は50cmの不整稍円形状に黄褐色土に礫が混じるブロック層を検出した。遺物は溝床付近から弥生土器の小片が僅かに出土しただけである。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、弥生時代以降に埋没したとしか境段階では判らない。

2. 第IV層出土遺物（第15図）

1は石庖丁の未製品である。緑色片岩の薄手の礫で、自然面に覆われるが、両面と周縁部を荒く研磨している。法量は長さ16.7cm、幅6.0cm、最大厚1.07cm、重さ208.3gを測る。調査区南東部の東側斜面の浅い凹みに薄く堆積した第IV層中から出土した。

2は台石である。風化の進んだ砂岩製で、ほぼ完存品である。器面はA面は平らで、中央部に微細な凹凸が観察されることから作業面としての機能が窺える。B面は両端が突起しており、片方の突起部の一部が欠失する。法量は長さ25.5cm、幅23.5cm、最大厚10.0cm、重さ10.3kgである。



第15図 第IV層出土遺物実測図

第6章 B区の調査

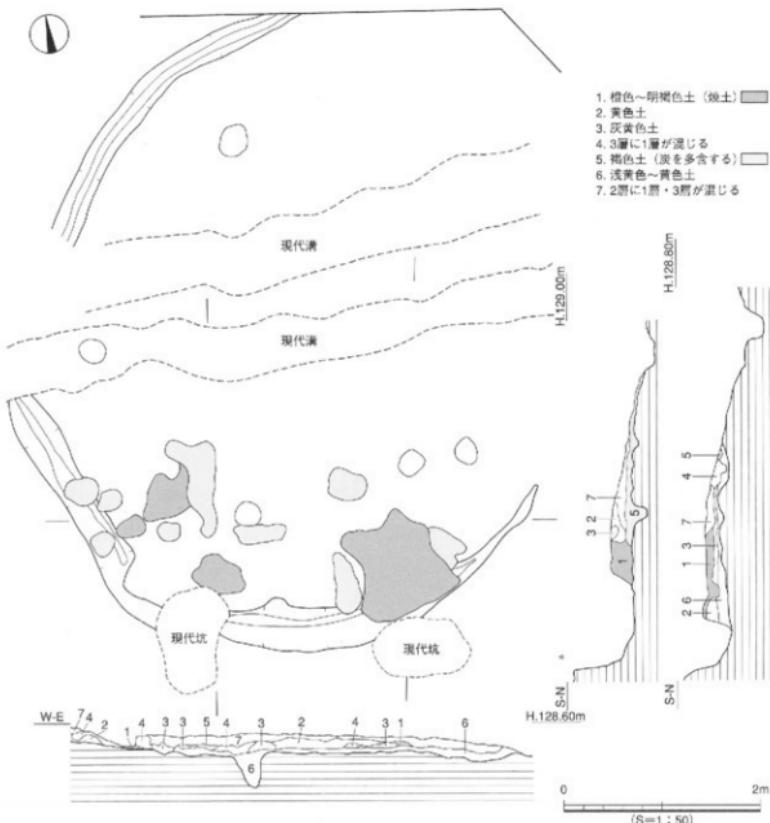
1. 検出遺構（第13図）

第V層上面にて弥生時代の竪穴式住居址1棟、土坑6基、柱穴1基を検出し、弥生土器片、須恵器片、石器、炭化材等が出土した。調査前は柑橘類の果樹園であったため、有機質肥料を入れる楕円形や不整形の穴が遺構検出面に掘り込まれている。遺構番号のない掘り込みは現代坑である。

(1) 竪穴式住居址

S B 1 (第16・17図)

調査区北側のG13～G14・H13～H14区に位置し、東西に平行して延びる2条の溝（現代の土地の



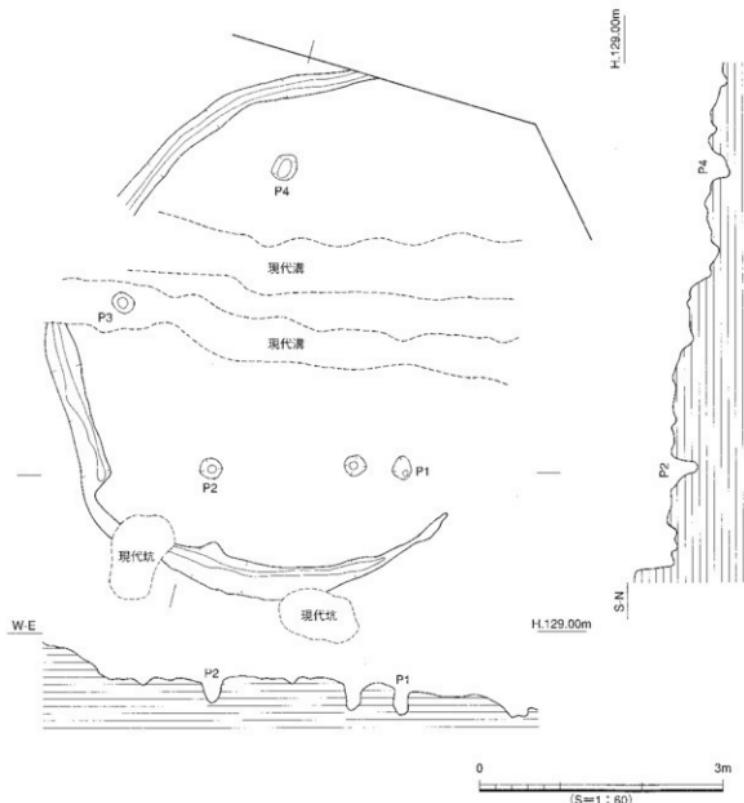
第16図 SB1測量図 (1)

B区の調査

境界を示す溝)に切られており、北側の丘陵下方は耕作のため削平を受けている。平面形態は橢円形を呈し、南側に残存する壁体はほぼ垂直であり、床面は水平を呈する。規模は東西6.0m、南北6.5m、深さ50cmを測る。周囲溝は幅10~24cm、主柱穴は4基(P1~P4)を検出し直徑25~40cm、深さ35~50cm、柱間1.8~2.5mを測る。床面付近では焼土と炭とが混ざり合った状態で検出された。埋土は黄褐色土で、遺物は弥生土器片・石斧・砥石・石器の木製品が出土する。

出土遺物(第18図)

弥生土器(3~6)：3~5は壺の口縁部である。3は外反する長い口頭部と口縁端部に沈線をもち、内面にハケ目調整、外面にミガキ調整を施している。4はやや外傾する長い口頭部をもち、外面は口縁部にナデ調整、頭部にミガキ調整を施している。5は直立する短い頭部に、外反する口縁部をもち、内外面ともハケ目調整を施している。6は壺の底部である。半底の底部で、短く内傾する立ち上がりをもつ。



第17図 SB1測量図(2)

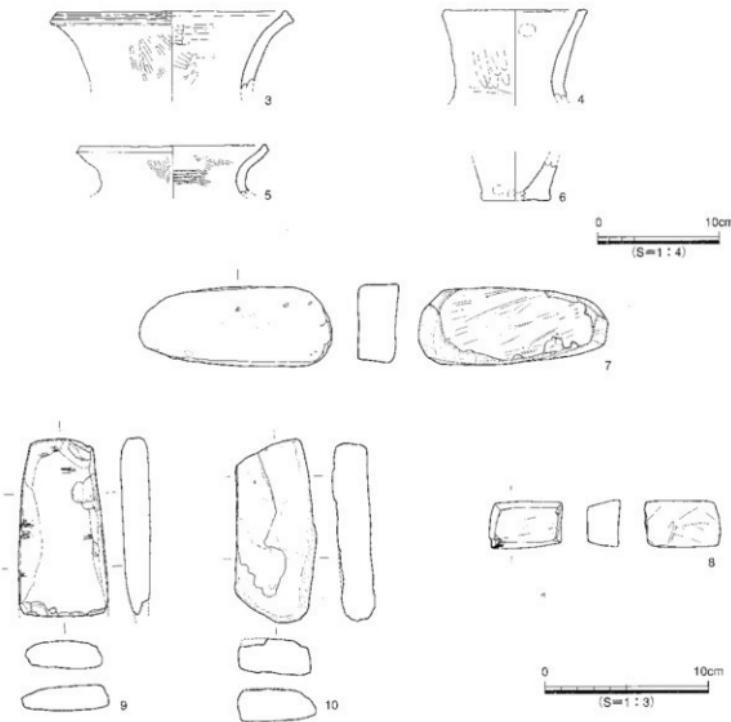
検出遺構

石器（7～10）：7・8は砾石の完存品で、両端面を除き四面が紙面として使用されている。上面では主に縦方向の微細な線条痕が観察される。7は表裏面とも滑らかな凹面をもち、長さ11.7cm、幅4.8cm、最大厚2.8cm、重さ221.9gを測る。8は各面を紙面として使用し、長さ4.6cm、幅2.8cm、最大厚2.0cm、重さ40.5gを測る小型品である。石材はいずれも右英粗面岩製。

9は偏平片刃石斧の完存品である。横断面形態は台形状を呈し、刃部に対し基部は狭く、基部の平面形態は弱円基である。基部に比べ側面の研削はあまく、崩張りで丸みがあり、面をなさない。さらに両主面の整形も同様に甘く、丸みがある。刃部は刃こぼれが顕著にみられる。長さ10.8cm、幅5.5cm、最大厚1.6cm、重さ196.5gを測る。石材は緑色片岩製。

10は原石である。石材は緑色片岩で、片面に一部器面の剥落がみられるが、これ以外は自然面で覆われる。長さ11.3cm、幅5.0cm、最大厚2.2cm、重さ219.4gを測る。

時期：出土遺物より焼絶時期は、弥生時代後期初頭とする。



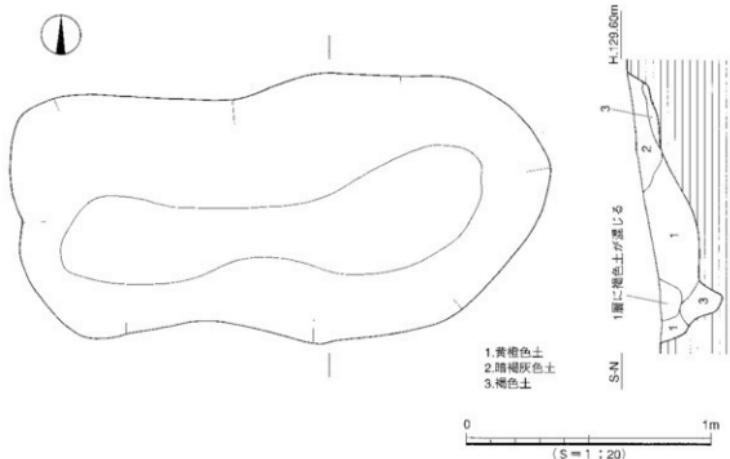
第18図 SB1出土遺物実測図

(2) 土坑

SK1 (第19図)

調査区南東部のH11～H12区に位置する。規模は長軸2.2m、短軸1.1m、深さ25cmを測る。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は旧地形に沿うように東側へ傾斜を示す。埋土は黄橙色土を基調とし、上部に暗褐灰色土、下部に褐色土がある。出土遺物はない。

時期：埋土がS B 1と同じことから廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。

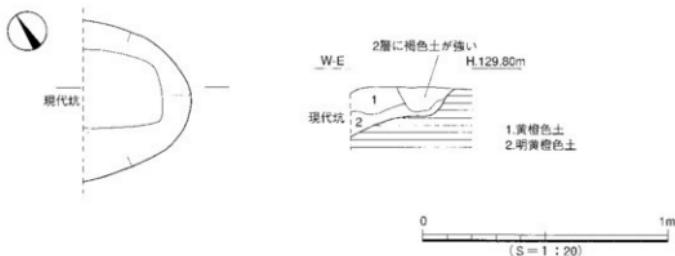


第19図 SK1測量図

SK2 (第20図)

調査区南西部のF12・G12区に位置し、西側は現代坑に切られる。規模は東西0.45m以上、南北0.67m、深さ19cmを測る。平面形態は楕円形、断面形態は舟底状を呈する。埋土は上層が黄橙色土、下層は明黄橙色土である。出土遺物はない。

時期：埋土がS B 1と同じことから廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。

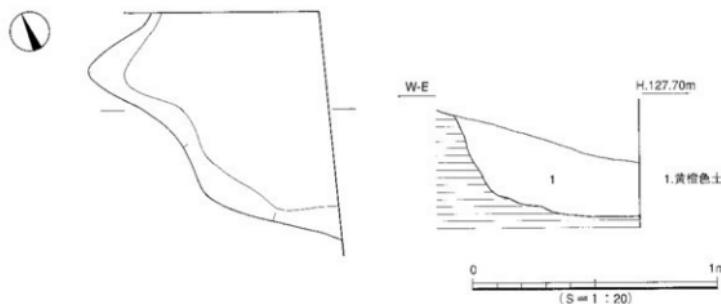


第20図 SK2測量図

SK 3 (第21図)

調査区南東部のI 12区に位置し、北・東側は調査区外に延びる。規模は東西0.96m以上、南北0.90m以上、深さ42cmを測る。平面形態は不整形、断面形態は逆台形状を呈する。埋土は黄橙色土である。出土遺物はない。

時期：埋土がSB 1と同じことから廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。

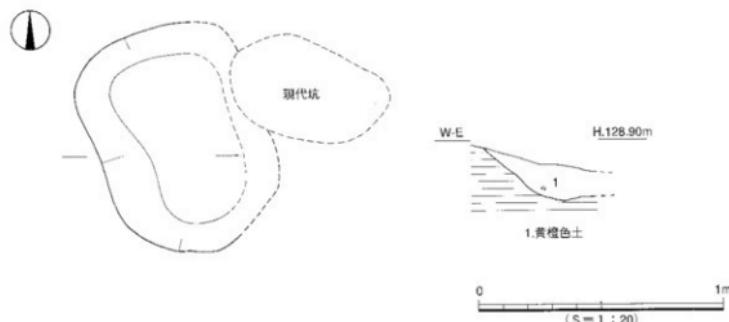


第21図 SK3測量図

SK 4 (第22図)

調査区南東部のH 13区に位置し、東側は現代坑に切られる。規模は東西0.46m以上、南北0.97m、深さ14cmを測る。平面形態は格円形、断面形態は逆台形状を呈する。埋土は黄橙色土である。出土遺物はない。

時期：埋土がSB 1と同じことから廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。



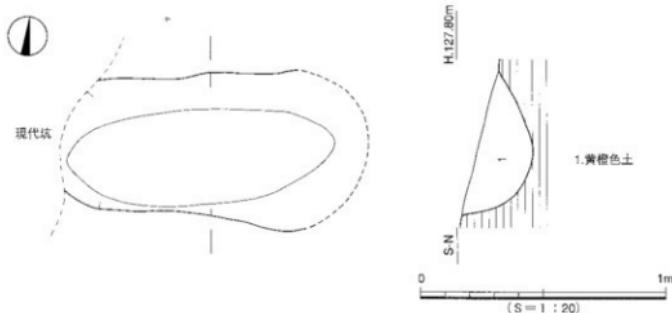
第22図 SK4測量図

B区の調査

SK 5 (第23図)

調査区北東部のH14区に位置し、西側は現代坑に切られる。規模は長軸1.23m以上、短軸0.58m、深さ23cmを測る。平面形態は橢円形、断面形態は逆台形状を呈する。埋土は黄橙色土である。出土遺物はない。

時期：埋土がS B 1と同じことから廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。

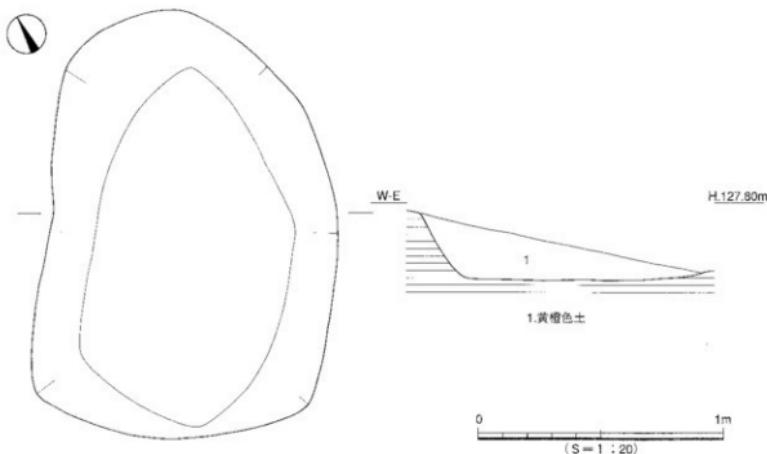


第23図 SK5測量図

SK 6 (第24図)

調査区南東部のH11～H12、I11～I12区に位置する。規模は長軸1.75m、短軸1.16m、深さ20cmを測る。平面形態は橢円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は旧地形に沿う様に東側へ傾斜を示す。埋土は黄橙色土である。遺物は弥生土器の小片が僅かに出土した。

時期：埋土がS B 1と同じことから廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。



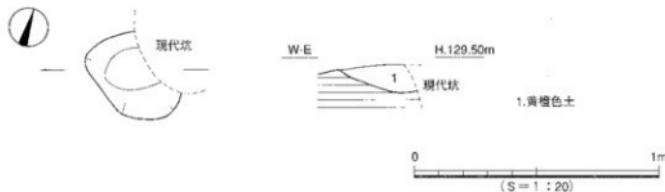
第24図 SK6測量図

(3) 柱穴

SP 1 (第25図)

調査区中央部西側のG12区に位置し、現代坑に切られる。平面形態は円形と推定する。規模は直径0.42cm、深さ11cmを測る。埋土は黄橙色土である。出土遺物はない。

時期：埋土がS B 1と同じことから廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。



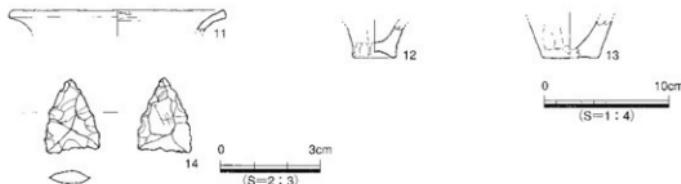
第25図 SP1測量図

2. 出土遺物

(1) 第IV層出土遺物 (第26図)

1) 弥生土器 (11~13) : 11は壺の口縁部である。大きく外反する口縁部に、端部は平らな面をなす。12・13は壺の底部である。12は上げ底の底部、13は平底の底部である。

2) 石器 (14) : 14は打製石鎌の完存品である。基部がわずかに抉られた凹基無茎式鎌で、二等辺三角形状を呈した小型品である。A面はほぼ全面に二次剥離がおよび、B面の二次剥離は周縁部のみである。法量は長さ2.2cm、幅1.7cm、厚さ4mm、重さ1.2gで、石材はサスカイト製。



第26図 第IV層出土遺物実測図

(2) 第I層出土遺物 (第27図)

15は壺形土器である。外反する口縁部は端部が平らな面をなし、内外面にはハケ口調整が施される。

16は壺形土器である。大きく外反する口縁部は端部がやや上方に肥厚され、端面には2条の沈線文が巡り、内外面はヨコナデ調整が施される。



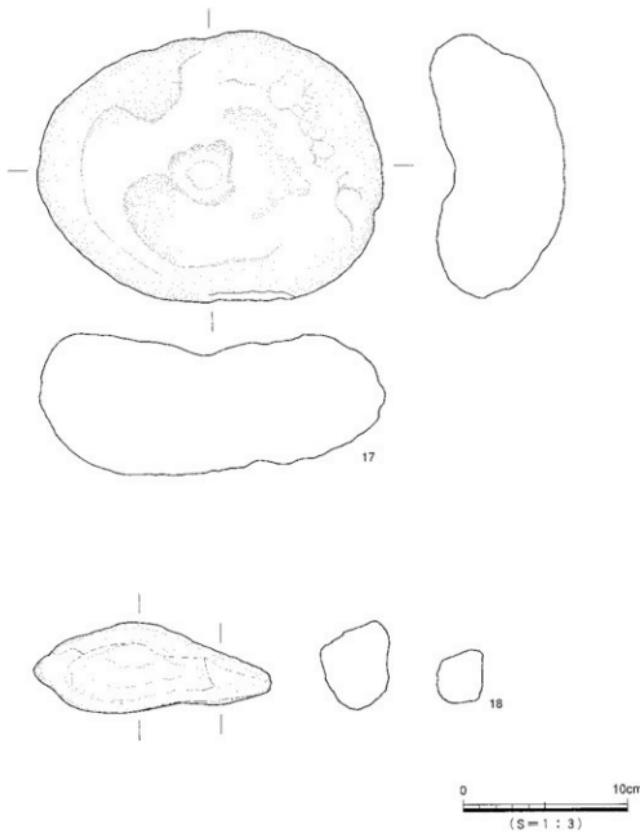
第27図 第I層出土遺物実測図

B区の調査

(3) 表採遺物 (第28図)

17は調査地の谷部で採取したものである。台石で、長さ21.1cm、幅16.1cm、厚さ7.2cm、重さ4.3kgを測り、上面中央部が凹む。石材は安山岩製である。

18はB区のS B 1周辺で採取したものである。厚みのある原石の中形品で、器面は自然面に覆われる。長さ14.4cm、幅5.5cm、最大厚4.2cm、重さ446gを測る。石材は緑色片岩である。



第28図 表採遺物実測図

遺構・遺物 一 凡例一

(1) 以下の表は遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 : 壺器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、頭→頸部

胎土・焼成欄 : 胎土標では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英

() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。(単位:mm)

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表1 積穴式住居址一覧

積穴 (SB)	時 期	平面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋 土	床面積 (m ²)	主柱穴 (本)	内装施設			周壁溝	備 考
							基床	土坑	炉		
1	弥生後期初頭	楕円形	6.5×6.0×0.5	黄褐色土	28.5 (推定)	4				○	北竈は削平を受ける

表2 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m) 長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時 期	備 考
1	A2・B2～B4・C4	V字状～レンズ状	12.5×5.0×0.5～1.0	南北	黄褐色土 黑色土	ナシ	不明	調査区外にのびる

表3 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (m ²)	埋土	出土遺物	時 期	備 考
1	H11～12	楕円形	逆台形状	2.2×1.1×0.25	1.87	黄褐色土	ナシ	弥生後期初頭	
2	F12・G12	楕円形	丸底状	0.67×0.45×0.19	0.21	黄褐色土 明黄色土	ナシ	弥生後期初頭	現代坑に切られる
3	I12	不整形	逆台形状	0.96×0.9×0.42	0.61	黄褐色土	ナシ	弥生後期初頭	調査区外にのびる
4	H13	楕円形	逆台形状	0.97×0.46×0.14	0.59	黄褐色土	ナシ	弥生後期初頭	現代坑に切られる
5	H14	楕円形	逆台形状	1.23×0.58×0.23	0.57	黄褐色土	ナシ	弥生後期初頭	現代坑に切られる
6	H11～12 I11～12	楕円形	逆台形状	1.75×1.16×0.2	1.75	黄褐色土	弥モ	弥生後期初頭	

表4 A区第IV層出土遺物観察表(石製品)

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備 考	国版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
1	木製品	完存	綠色片岩	16.7	6.0	1.07	206.3		11
2	石 石	ほぼ完存	砂 岩	23.5	23.5	10.0	10,300		

表5 B区S B 1出土遺物観察表(土製品)

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面)	胎 土	燒 成	備 考	国版
				外 面	内 面					
3	壺	口径(18.8) 残高 6.4	外反する長いU字型の縁部に沈縫 が巡る。	ミガキ	ハケ目(1mm/cm) 指痕表	にぶい褐色 にぶい褐色	石(1～2)	○		12

B区の調査

B区SB1出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
4	盃	口径 11.6 残高 7.3	やや外反する口縁部に端部は平らな面をなす。	⑩ナデ ⑪ミガキ	ナ デ	橙 色 桜 色	石・長(1~5) ○		12
5	瓶	I. 径 (15.2) 残高 3.9	直立する錐形部に外反する口縁部をもつ。	ハケ目(7本/cm)	ハケ目(8本/cm)	にぶい黃褐色 桜 色	石・長(1~2) ○		12
6	塊	底径 (5.6) 残高 3.25	平底の底面からやや内溝気味に立ち上がる。	ナ デ 指痕	ナ デ	にぶい黄褐色 灰 色	石・長(1~4) △		12

表6 B区SB1出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
7	砾 石	完存	石英風化岩	11.7	4.8	2.8	221.9		12
8	砾 石	完存	石英風化岩	4.6	2.8	2.0	40.5		12
9	扁平片岩斧	完存	綠色片岩	10.8	3.5	1.6	196.5		12
10	原 石	完存	綠色片岩	11.3	5.0	2.2	219.4		

表7 B区第IV層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
11	盃	I. 径 (17.4) 残高 1.8	大きく外反する口縁部に端部は平らな面をなす。	ナ デ	ナ デ	にぶい黄褐色 桜 色	長(1) ○		11
12	瓶	底径 (3.4) 残高 2.5	上円底の底部である。	マメツ	マメツ	浅黄褐色 浅黄色	石・長(1) ○		11
13	塊	底径 (4.6) 残高 3.0	平底の底面からやや内溝気味に立ち上がる。	ナ デ	マメツ	にぶい黄褐色 浅黄褐色	石・長(1~3) ○		

表8 B区第IV層出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
14	石 鏊	完存	サヌカイト	2.2	1.7	0.1	12		11

表9 第I層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
15	瓶	口径 (15.2) 残高 1.3	外反する口縁部の端部は平らな面をなす。	ハケ目 (11~13本/cm)	ハケ目 (11~13本/cm)	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1~2) ○		11
16	盃	口径 (19.0) 残高 2.2	大きく外反する口縁部に端部はやや上方に凹屈され、縁面部に2条の沈線がある。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙 色 にぶい褐色	石・長(1~2) ○		11

表10 表採出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
17	台 石	完存	安山岩	21.1	16.1	7.2	4,300		
18	風 石	完存	緑色片岩	14.4	5.5	4.2	446		

第7章 調査の成果と課題

今回の調査では、弥生時代の遺構と遺物、時代不詳の溝を確認した。遺構は竪穴式住居址1棟、土坑6基、柱穴1基、溝1条、遺物は、弥生土器の壺・壺、石器の石庖丁・石鎌・砥石・作業台、石器の未製品や原石が出土した。

1. 土層

調査地は丘陵の尾根部に位置しており、調査前は柑橘類の果樹園であったため、至る所に穴が掘り込まれていた。調査の結果、第Ⅰ層の表土は腐葉土、第Ⅱ層は腐葉土を含む堆積土、第Ⅲ層は現代の農耕に伴う造成土、第Ⅳ層は弥生時代の遺物包含層であり、B区の竪穴式住居址や土坑・柱穴を覆つており、遺構の埋土となり、尾根部の比較的平坦地にだけ堆積する。第Ⅴ層の地山はA区やB区の北側の傾斜地では岩盤であり、A区の北側からB区の南側にかけては堆積土であり、この上に住居遺構が形成される。

2. 遺構

A区で検出したSD1は、旧地形の岩盤にV字形に掘り込まれた人工的な溝であり、尾根に沿う様にやや湾曲しながら縱断する。溝の南北端は調査区外に延びており、現況から調査区外の南側ではさらに深くなり、北側は消滅すると推測する。土層の堆積状況や埋土に有機物が殆ど含まれていないことから、比較的短期間に人工的に溝が埋没したことが考えられる。出土した弥生土器の小片は流入品であり、溝に直接関連した遺物の出土ではなく、溝の埋没時期は不明である。SD1南側の数メートル先の尾根線上には、松ヶ谷古墳群の9号墳が分布調査で確認されており、この溝はその古墳に伴う施設であることも考えられる。

B区は、弥生時代後期の竪穴式住居址SB1と、それと同じ埋土の土坑や柱穴を検出し、この丘陵尾根部の比較的平坦な地に集落を構えていたことがわかった。竪穴式住居址は、南壁は地山を削って壁となすが、北半は掘り方がない、土壁をもたない可能性がある。主柱穴は4本を検出しているが、その配置状況からは北東部に1本あったものと考えられ、5本柱を想定しておく。住居址内では、南半分の床面付近のいたる所から焼土や炭化材を検出した。このことから、火災を受けた住居が考えられる。

また、SB1内からは扁平片刃石斧や砥石に混じり、石庖丁の未製品や原石が出土したことから、この住居址内では、砥部川で採取される緑色片岩を用いて石器の製作が行われていたとみられる。今回の調査では、竪穴式住居址は1棟に検出が限られたが、調査地外である北隣にも比較的平坦な地が延びており、この地にも竪穴式住居址の存在が考えられる。

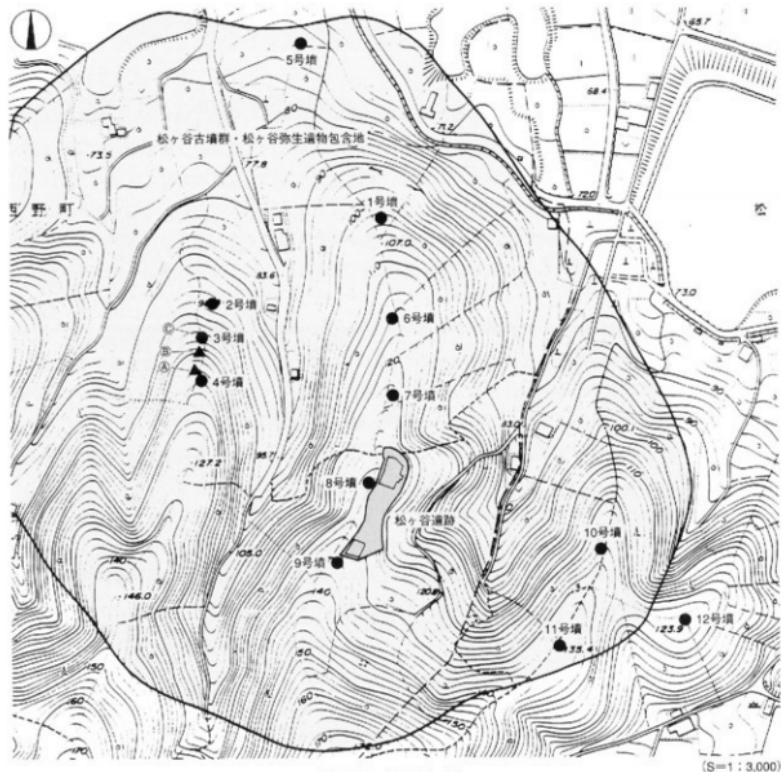
3. 松ヶ谷古墳群内で確認した石室

(1) 立地（第29図）

松山南部地区農道整備事業に伴う西野町の試掘調査2区西隣で、地表面に石の露出が確認された。石が露出するのは、南から北へ延びる丘陵尾根上の北西斜面である。この丘陵の尾根幅は15~20mを測り、東西の両側は急斜面となって谷へ落ち込んでいる。一方、南側は緩やかに上がり、雜木林が形成され、地表面には落ち葉が厚く堆積する。北側は、現在、果樹園として土地利用が図られ、蜜柑が栽培されている。

標高は、最高所で117.913m、丘陵の北に広がる水田面との比高差は47~34mを測り、視界が狭いながらも平野を望むことができる。

なお、丘陵の北西斜面は段々状を呈し、他と比べて地形の変化は著しい。この段と段との間には幅4m程度の緩斜面が形成されているが、蜜柑等の果樹は栽培されていない。

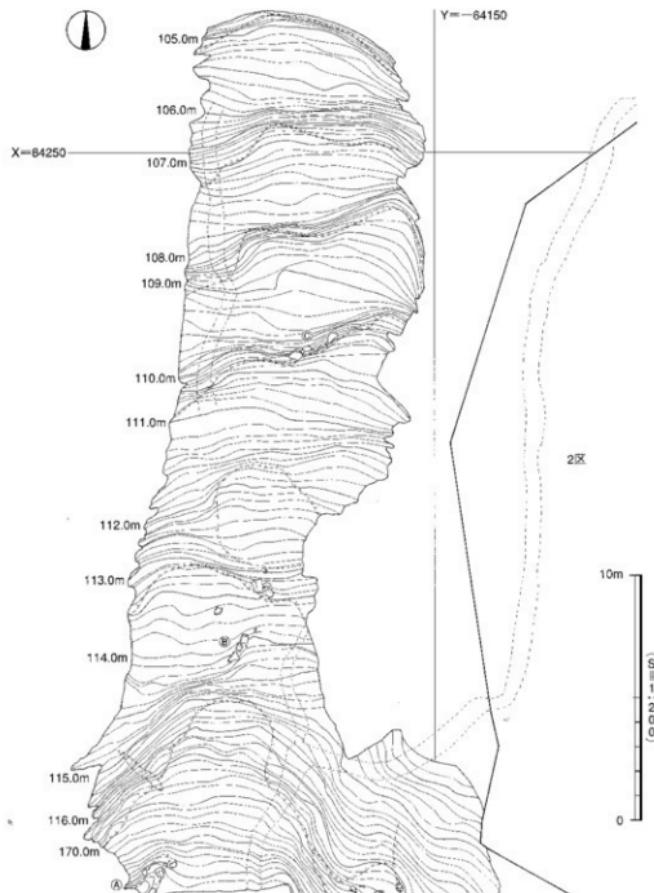


第29図 位置図(1)

(2) 概要 (第30~32図)

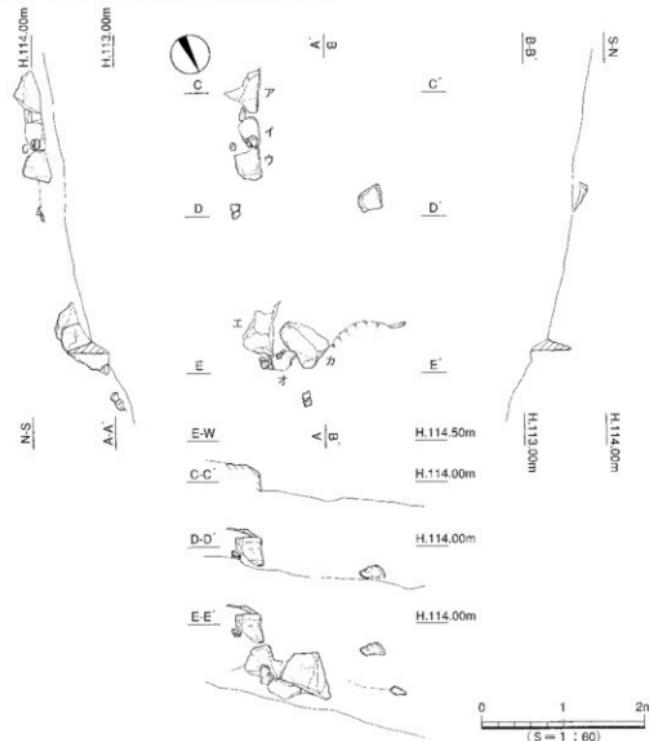
尾根上の地表には、数箇所で石が露出している。報告では、石が露出する箇所を便宜的に南から北へ向かってA・B・C地点として記述する。

まず、A地点は、石が最高所の標高117.9~117.3mに分布するところである。石は40cm大が数個あるが、規則性はなく、散在する。石の多くは2~3cmの大いの碎石で、地表面に岩脈が露出しているところでは、碎石が多く分布する傾向がある。このことから、A地点は石室を構成するものではなく、露出する岩脈から風化・転石した碎石であると考えられる。したがって、A地点に伴う墳丘は想定できない。



第30図 位置図 (2)

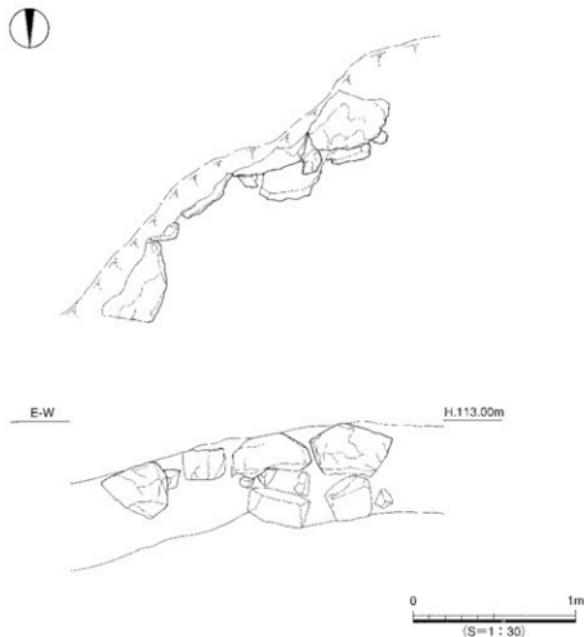
B地点は、石が標高114.1~113.2mに分布するところである。南から数えて2段目の緩斜面に、石が点在する。石は40~60cmの大形の切石が多く、東側の切石（ア～エ）がほぼ直線的に面をなして並ぶ。石は、N-27.5°-Eを長軸方向とする石室で、切石を利用するところから古墳時代後期～終末期の横穴式石室と推定される。なお、開口方向や石室の規模は不明である。切石（エ～カ）には、東西方向に傾斜変換線がみられ、北西部にはコーナーを想定させるラインが看取される。さらに、北東部にも、コーナー状の傾斜変換線が認められる。ただし、コンターラインは、これらの傾斜変換線に沿うようにはならず、切石も整然と積み上げられた状態で遺存しておらず、切石（カ）はあたかも切石（エ）からずれ落ちたかのように思える。これらのことから、傾斜変換線が後世の地形改変によって生じた可能性があり、必ずしも古墳築造時のものとはいえない。したがって、B地点に伴う墳丘については、地表面を観察する限り、墳形や墳丘規模を特定することはできない。なお、確認された切石（ア～カ）の表面には、苔が広範囲にわたってみられ、このような状態がかなり以前から生じていたことを示唆している。切石（ア～ウ）に対して切石（エとカ）は大形で、しかも50~60cm低い位置にある。このことは、切石（ア～ウ）の下には、さらに、大形の切石が存在する可能性があり、壁体が少なくとも、もう一段遺存しているかもしれない。



第31図 B地点現況図

C地点は、石が標高109.7~110.2mではば並んで分布するところである。南から数えて緩斜面の3~4段目に移行する崖面に石が露出し、一部は積み上げられている。石は30~50cm大の切石で、ほぼ水平に2段が積み上げられ、間には10cm大小の小形の切石が詰められるところがある。石室の長軸方向は判然とせず、露出する石列が石室との関係を構成しているかは不明である。

A~C地点を含めて、確認した範囲では、遺物は採取できていない。



第32図 C地点現況図

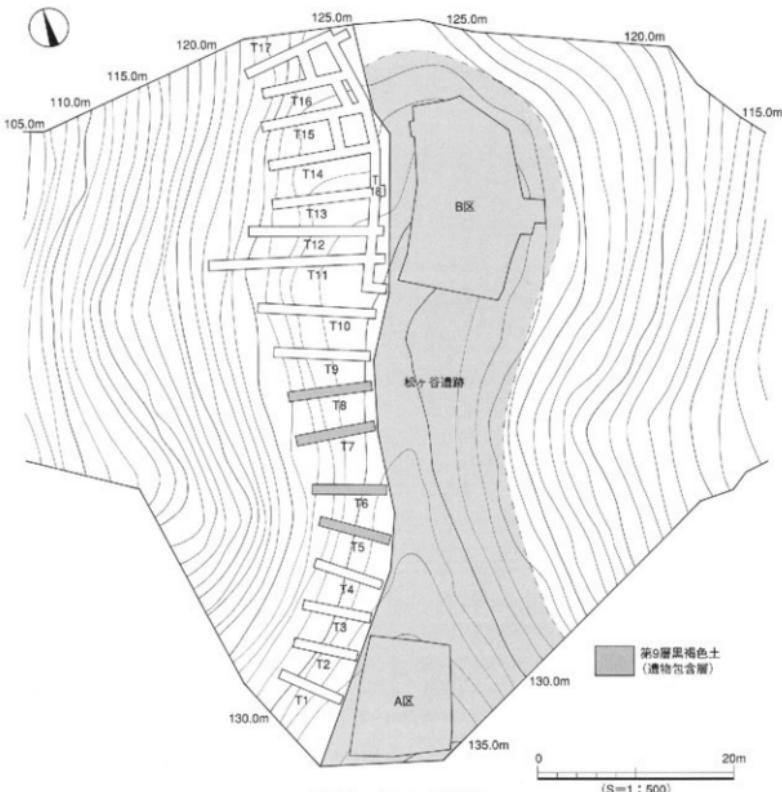
(3) 小結

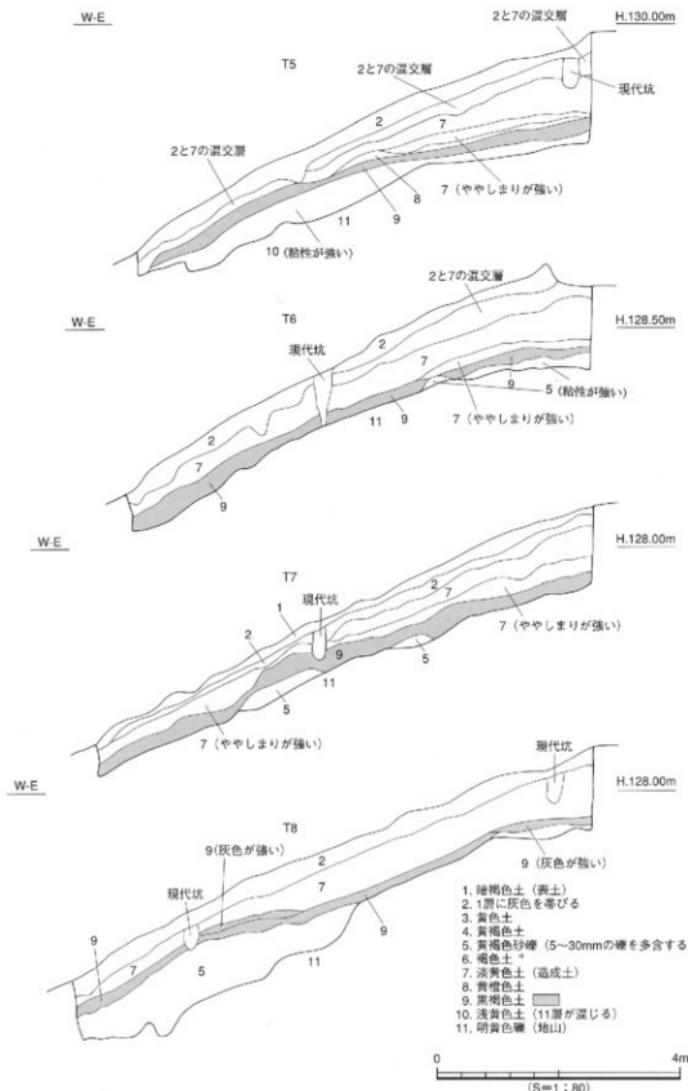
今回、2区周辺で確認されたB地点とC地点は、それぞれが横穴式石室である可能性が認められた。これを、愛媛県が作成した古墳分布台帳と照らし合わせたところ、B地点は松ヶ谷3号墳、C地点は松ヶ谷2号墳に該当する可能性が高いものと考えられる。このことは、2区のある丘陵尾根上には、後期から終末期にかけての古墳が複数存在することを示唆するものである。B地点やC地点よりも高所に位置する3区では、古墳の存在を示す遺構や遺物が全く確認できなかった。このことから、松ヶ谷古墳群は、平野を望むことができ、しかも標高のやや下がった丘陵の尾根線上に分布する可能性が考えられるのである。これは、東の尾根筋にある松ヶ谷1号墳が、標高のやや下がった位置に築造されていることと共通しており、今回の確認により、同古墳群の分布を検討する上で、重要なデータが得られたといえよう。

4. 西野町試掘調査の出土遺物

(1) 概要 (第33・34図)

松ヶ谷遺跡に隣接する同一丘陵上の西側斜面で、松山南部地区農道整備事業に伴う西野町の試掘調査1区において、急斜面から弥生土器片が出土する層を検出した。この層は尾根がくびれた部分のT5～T8にかけて層厚10～35cmで堆積しており、その層の中から弥生土器片が若干出土した。この層は黒褐色土のやや粘性をもつ層で松ヶ谷遺跡側の尾根部や斜面部では未検出であり、この層の下からは遺構は未検出である。層位は第1層暗褐色土（表土）、第7層淡黄色土（造成土）、第9層黒褐色土（弥生土器片を含む）、第10層浅黄色土、第11層明黄色礫（地山）である。





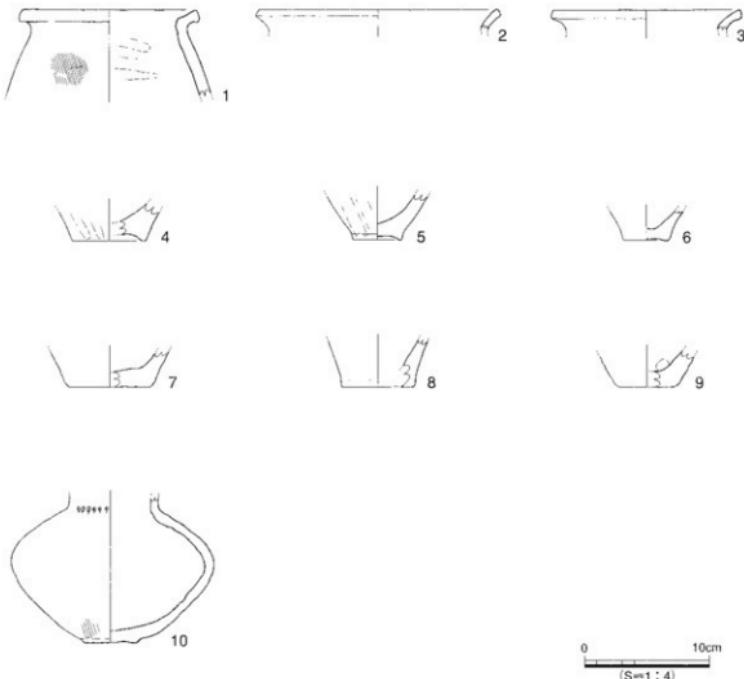
第34図 T5~T8土層断面図

(2) 第9層出土遺物 (第35図)

出土した遺物は全て弥生土器であり、器種は甕形土器・壺形土器である。

1～9は甕形土器である。1～3は口縁部である。1は「く」字状のL字縁部に端部は下方にやや肥厚される。外面頸部付近に横ナデ、上胴部にハケ目、内面はナデがある。2・3は外反する口縁部に端部は平らな面をなし、内外面に横ナデがある。4～9は底部である。4は上げ底で、内外面にナデがある。5はやや上げ底の底部はくびれ気味で、内外面にナデがある。6は僅かに上げ底の底部をもつ。7～9は平底の底部である。9は内面にナデがある。

10は壺である。やや上げ底の底部に胴部は強く張り出し、肩部に刺突文をもち、頸部は直立気味に立ち上がる。



第35図 第9層出土遺物実測図

(3) 小結

試掘調査地は松ヶ谷遺跡に隣接する西側の傾斜地に位置する。松ヶ谷遺跡では弥生時代後期初頭の竪穴式住居址や土坑を検出し、当該期の集落の存在を窺う資料を検出している。今回の試掘調査で遺物がT5～T8付近の尾根がくびれた急傾斜地に堆積する黒褐色土の埋土中から出土した。黒褐色土の下層は砾の地山であり、地山面での遺構は未検出であった。

松ヶ谷遺跡と同じ尾根上でも竪穴式住居址が検出された地点と比較すると、尾根の幅が狭く造構の存在の可能性は低く、遺物は松ヶ谷遺跡B区で出土したものと同時期のものであり、B区の標高とほぼ同じレベルから下にかけて堆積することから、尾根部にある松ヶ谷遺跡の遺物が、くびれた急傾斜地に流れ込んだものと考えられる。

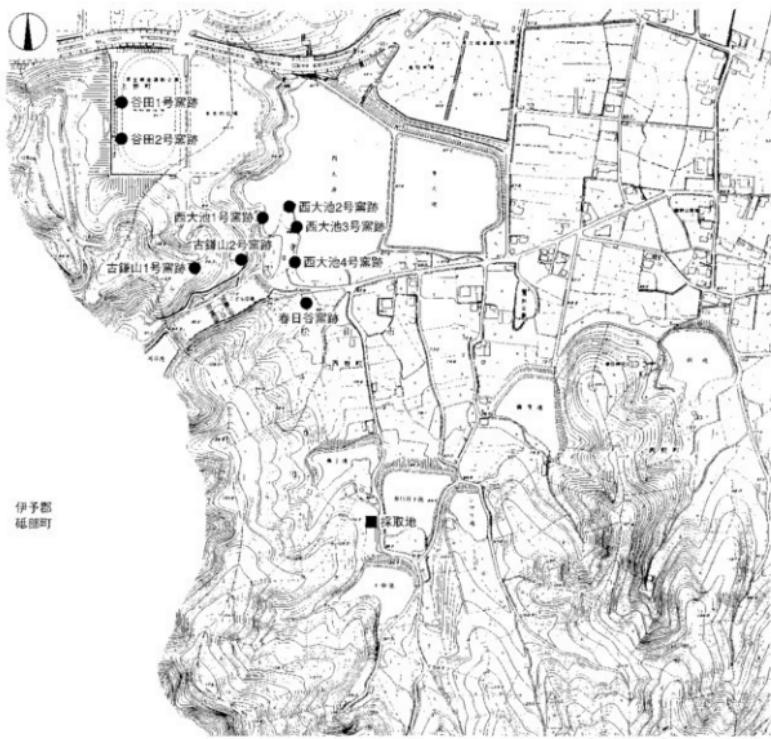
表11 第9層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		色調(外側) 色調(内側)	胎土 模様	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径(14.0) 残高 7.0	口縁部は「く」字状を呈し、腹部はやや下方に膨張される。	ハケ目	マメツ ナア	浅黄褐色 浅黄褐色	石長(1~2) ○		
2	甕	口径(20.0) 残高 1.7	外反する口縁部の腹部は平らな面をなす。	ヨコナダ	ヨコナダ	に赤い褐色 暗褐色	砂 石長(1) ○		
3	甕	口径(15.4) 残高 1.7	外反する口縁部の腹部は平らな面をなす。	ヨコナダ	ヨコナダ	細灰褐色 (内)細灰褐色 に赤い褐色	砂 石(1) ○		
4	甕	底径(6.0) 残高 3.0	やや上げた底の底部をもつ。	ナデ	ナデ	に赤い黄褐色 浅黄褐色	石長(1~3) ○		
5	甕	底径(4.0) 残高 3.5	やや上げた底の底部をややくびれ、内湾気味に立ち上がる。	ナデ	ナデ	浅黄褐色 浅黄褐色	石長(1~2) ○		
6	甕	底径(3.6) 残高 2.5	僅かに上げた底の底部をもつ。	マメツ	マメツ	褐色 に赤い黄褐色	石長(1~4) ○		
7	甕	底径(6.6) 残高 2.9	平底の底部。	マメツ	マメツ	褐色 浅黄褐色	石長(1~5) ○		
8	甕	底径(5.8) 残高 3.8	平底の底部。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石長(1~5) ○		
9	甕	底径(4.6) 残高 3.0	平底の底部。	マメツ	ナデ 指觸痕	浅黃色 黃褐色	石長(1~4) ○		
10	甕	底径 4.3 残高 11.8	やや上げた底の底部に網目は強く張り出す。肩部に刺突文をもつ。腹部は直立気味に立ち上がる。	マメツ ハケ目	マメツ	浅黃色 灰オリーブ色	石長(1~3) ○		

5. 西野古墳群内の採取遺物

(1) 概要（第36図）

今回報告する資料は、松山市西野町における松山南部地区農道整備事業が行われる西野古墳群内の西端に位置する丘陵裾部の海拔約94mの果樹園から多数の須恵器が地表面に露出しており、地権者の承諾のもと遺物を採取したものである。当地の北側約330~700mの地点には多数の窯跡が確認されている。また、地権者によると昭和の中頃に当地を開墾する際に斜面部から、多量の須恵器が焼けた土に混じり出土した。遺物は果樹園の東斜面の裾部よりやや上がった位置に多く散乱しており、この地点に窯跡が存在していたという。今回報告する資料は、窯跡群の分布状況を解明する上で貴重な資料である。



第36図 位置図

(S=1:7,000)

(2) 採取遺物

遺構 焼土面の一部を確認し、窯壁片が散布する。

遺物（第37・38図）

今回採取した遺物は全て須恵器であり、器種は坏蓋、坏身、高坏、器台、壺、壺がある。

坏蓋（1～14）1は天井部と口縁部の境に屈曲をもつ。2～5は、口縁部は下方にのび、端部は丸くおさまる。5は口縁端部に焼成後の剥離痕がある。6～8は天井部から口縁部にかけ緩やかにカーブしており、口縁端部は丸くおさまる。9～13はかえりをもつ坏蓋である。9はかえり部が口縁端部より突出し、口縁端部はかえり部から屈曲して下がる。10は口縁端部よりやや突出するかえりがつく。11は口縁端部とかえりの高さはほぼ同じである。12・13は口縁端部よりかえりの方が短い。14は坏蓋と坏身が焼成時の種により付着した状態のままである。

坏身（15～27）15・16は受部に焼成時における坏蓋の口縁部の貼り付いた痕跡が残る。17・18は内傾する立ち上がり部に焼け歪みがある。19は上方にのびる立ち上がり部に焼け歪みがある。20は上方にのびる立ち上がりと、外方にのびる受部をもつ。21は受部に沈線状の凹みをもつ。22～25は立ち上がりは上方にのび、受部は凹む。26は立ち上がりはやや内傾し、受部は凹む。27は立ち上がりはやや内傾し、外方にのびる受部に、焼成後の坏蓋の剥離痕がある。

高坏（28～32）28は有蓋高坏で、凹みをもつ受部の外面に1条の沈線が巡る。29は脚部中位に凹みを2条もつ。30は外反する脚柱部に、端部は平らな面をなす。31は外反する脚裾部に端部は下方に肥厚される。32は脚柱部に稜をもち、裾部はラッパ状に広がり、裾部内面に貼り付け凸帯痕が残る。

台付壺（33～35）33～35は脚部で「ハ」字状を呈する。33は脚端部は斜めに面をなす。34は脚端部は平らな面をなす。35は脚端部は内側が接地する。

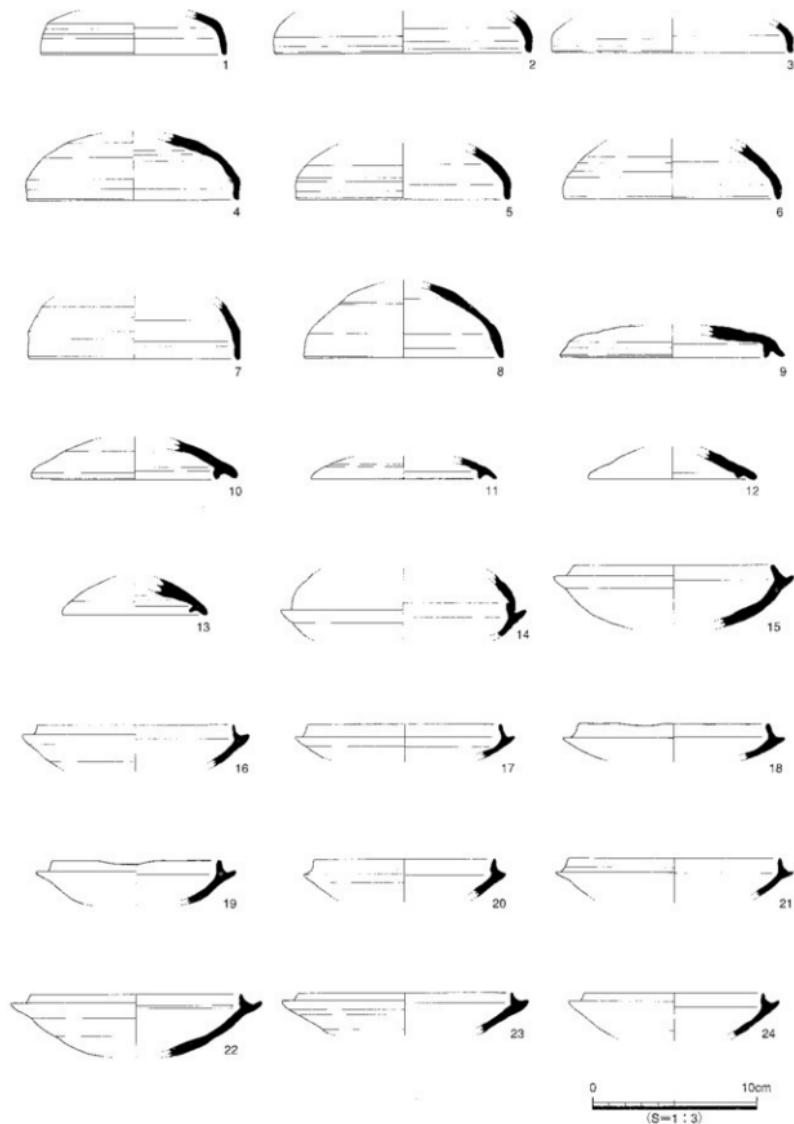
壺（36～40）36は口縁端部がわずかに上方に拡張され波状文が施される。37・38は口縁部は外反し、端部は肥厚され、37は尖り気味、38は丸みをもつ。39は外反する口縁部の内面はやや肥厚される。40は外反する口縁端部に沈線状の凹みをもつ。

鉢（41）内湾する胴部に、口縁部は外反し端部は丸くおさまる。

器台（42）「ハ」字状の脚部に裾部はさらに外反し、円孔をもつその円孔の外面に線刻で模様が施される。

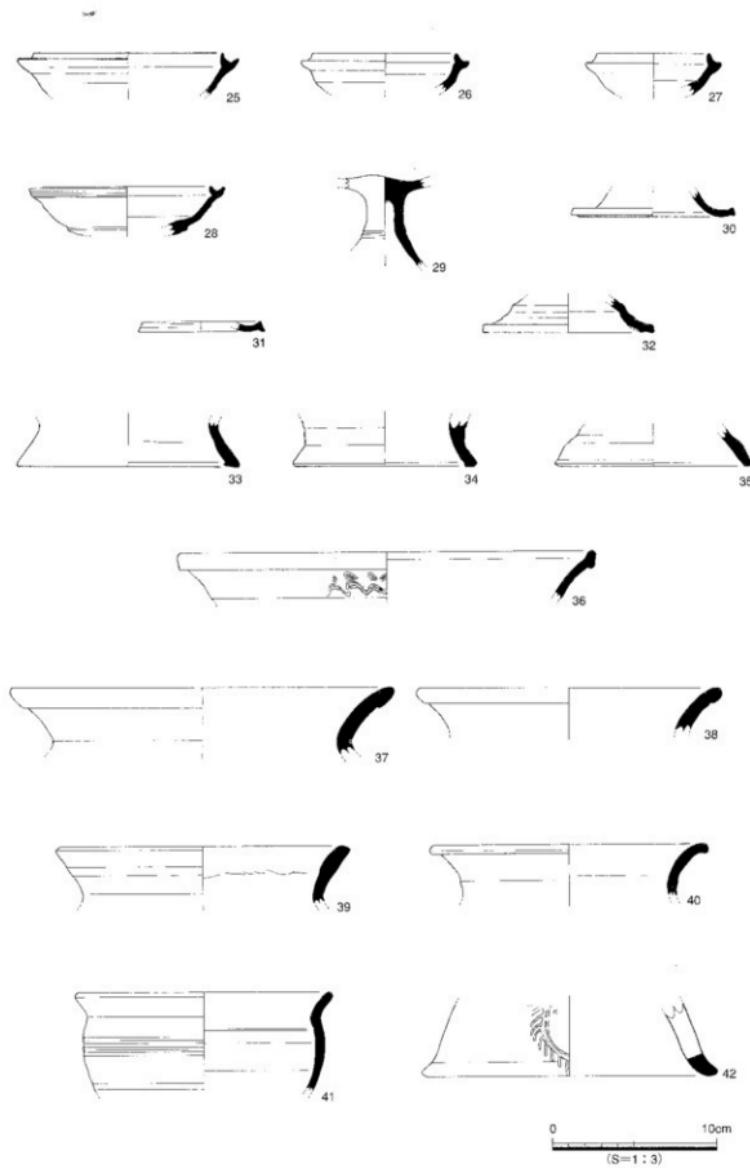
(3) 小結

今回遺物を採取した地域は、砥部古窯跡群と呼ばれる須恵器や埴輪を焼成した窯跡が分布している。この砥部古窯跡群は砥部川両岸と御坂川左岸の丘陵裾部に分布する6世紀中葉から8世紀までの窯跡群で、砥部川を遡るほど時代が新しくなる傾向を示している。この中でも当地周辺で検出されている窯跡群は、6世紀中葉から7世紀初頭にかけてのもので、御坂川左岸の一群の中でも最南端となる。今回採取した遺物の中には、坏の蓋と身が焼成時に溶着していたり、焼き歪み品や窯壁片などを多数採取したことから、窯施設の形態や規模・残存状況は未調査のため不明であるが、当地に窯が存在していたことを裏付ける資料である。採取品から6世紀中葉から7世紀初頭にかけて操業していたと考えられる。



第37図 採取遺物実測図(1)

内野町古墳群内の採取遺物



第38図 採取遺物実測図 (1)

表12 採取遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	流量(cm)	形態・施文	調査		色調(外面)	胎土焼成	備考	国版
				外面	内面				
1	环状	口径 (11.4) 残高 2.6	天井部と口縁部の間に筋曲をもつ。内側下がり、口縁部は下方にのみ複数は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	暗オリーブ灰色 暗オリーブ灰色	良(1) ◎	自然釉	
2	环状	口径 (15.8) 残高 2.3	内側下がり、口縁部は下方にのみ複数は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 ミリーブ灰色	少 ◎		
3	环状	口径 (14.8) 残高 1.8	口縁部は下方にのみ、その外側はやや凹み複数は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 暗オリーブ灰色	石・良(1) ◎	自然釉	
4	环状	口径 (13.0) 残高 4.0	複数にカーブする天井部から口縁部は下方にのみ複数は丸くおさまる。	⑤回転ナデ ⑥回転ヘラ削	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	石・長(1~5) ◎	自然釉	
5	环状	口径 (13.2) 残高 3.0	口縁端部に、洗成後の剥離痕がみられる。	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 暗オリーブ灰色	石・長(0.5) ◎	自然釉	
6	环状	口径 (13.2) 残高 3.5	天井部から口縁部にかけてややかにカーブしており、口縁部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 暗灰色	砂 良(4) ◎		
7	环状	口径 (13.0) 残高 3.5	天井部から口縁部にかけてややかにカーブしており、口縁部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰白色	石・長(1) ◎		
8	环状	口径 (12.2) 残高 4.5	天井部に調査時にできた凹みをもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1) ◎	自然釉	
9	环状	口径 (13.8) 残高 2.1	内側に口縁部より突出するかえりがつく。	⑦回転ナデ ⑧回転ヘラ削	回転ヘラ削	オリーブ灰色 暗オリーブ灰色	石・長(1~2) ◎		
10	环状	口径 (12.6) 残高 2.5	内側に口縁部よりやや突出するかえりがつく。	⑨回転ナデ ⑩回転ヘラ削	回転ナデ	灰白色 暗黄褐色	石・長(1~2) ◎		
11	环状	口径 (11.4) 残高 1.3	口縁端部と内側のかえりの高さはほぼ同じである。	⑪回転ナデ ⑫回転ヘラ削	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	長(1) ◎		
12	环状	口径 (10.4) 残高 1.8	口縁端部より内側のかえりの方が無い。	回転ナデ	回転ナデ	暗赤褐色 半灰色	砂 長(1~2) ◎		
13	环状	口径 (8.8) 残高 2.3	口縁端部より内側のかえりの方が無い。	回転ナデ	回転ナデ	深紫紅色 灰白色	砂 ◎		
14	牛首 环身	受部端強化 (15.0) 残高 3.8	焼成時に特ににより、全の口縁内側と环の立ち上がり部が黒引付いている。	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 オリーブ黑色	石・長(1~4) ◎	自然釉	
15	环身	口径 (12.2) 残高 3.8	受部の一部に洗成時ににおける特徴の貼り付いた口縁端部が残る。	ナデ	回転ナデ	暗オリーブ色 灰白色	石・長(1~2) ◎	自然釉	
16	牛首	口径 (14.0) 残高 2.5	受部の一部に洗成等における特徴の貼り付いた口縁端部が残る。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰白色	砂 石・長(1) ◎		
17	环身	口径 (11.8) 残高 2.0	内側の立ち上がり部に焼け跡がある。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰白色	砂 石・長(1) ◎		
18	环身	口径 (11.6) 残高 2.1	内側の立ち上がり部に焼け跡がある。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰白色	砂 石・長(1) ◎	自然釉	
19	环身	口径 (10.2) 残高 2.6	上方にのびる立ち上がり部に焼け跡がある。	ヨコナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰褐色	砂 石・長(1) ◎	自然釉	
20	环身	口径 (11.0) 残高 2.3	立ち上がり部は上方に、受部は外方にのびる。	回転ナデ	ナデ	灰褐色 灰オリーブ色	砂 石・長(1) ◎	自然釉	
21	环身	口径 (13.0) 残高 2.3	受部は沈底状の凹みをもつ。	マツツ	回転ナデ	灰白色 暗褐色	砂 石・長(1) ◎		

採取遺物観察表

(2)

番号	器種	測量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) 内面	施土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
22	环身	口径(13.0) 残高 3.8	立ち上がりは上方にのが、受部は凹む。	②凹輪ナデ ③圓輪ヘア削	同輪ナデ	灰 色 オリーブ灰 色	砂 石・長(1) ○		
23	环身	口径(13.0) 残高 2.4	立ち上がりは上方にのが、受部は凹む。	マメツ	同輪ナデ	灰 色 灰白色	石・長(1) ○		
24	环身	口径(11.0) 残高 2.6	立ち上がりは上方にのが、受部は凹む。	ナデ	ナデ	灰白色 淡オーラー色 (青灰モーラ色)	石・長(1~2) ○	自然釉	
25	环身	口径(11.6) 残高 2.5	立ち上がりは上方にのが、受部は凹む。	同輪ナデ	同輪ナデ	灰 色 灰 色	砂 長(1~2) ○		
26	以身	口径(8.8) 残高 2.3	立ち上がりはやや内傾し、受部はやや凹む。	ヨコナデ	同輪ナデ	淡オーラー色 灰白色	砂 石・長(1) ○	自然釉	
27	环身	口径(6.6) 残高 2.3	立ち上がりはやや内傾し、外方にのびる受部に、焼成後の重量の割合がかかる。	②凹輪ナデ ③圓輪ヘア削	同輪ナデ	浅灰色 灰白色	砂 ○		
28	有蓋 高杯	口径(10.2) 残高 2.9	凹みをもつ受部の外筋に流線が1条巡る。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 に青い赤褐色	砂 石・長(0.5) ○		
29	高杯	残高 5.5	脚部中央に凹みが2条巡る。	ヨコナデ	同輪ナデ	灰白色 灰 色	砂 石・長(1) ○	自然釉	
30	高杯	残高 1.5	外反する脚部に、脚部は平らな凹をなす。	ナデ	ヨコナデ	灰 色 灰白色	砂 石・長(1) ○	自然釉	
31	高杯	残高 0.6	外反する脚部に、底部は下方に肥厚される。	同輪ナデ 流線	同輪ナデ	灰 色 灰 色	砂 石・長(1) ○		
32	高杯	口径(10.5) 残高 2.3	脚部に棱をもち、脚部はラップ状に広がり、底部内面に歯付け凸筋が残る。	ヨコナデ	ヨコナデ	紫褐色 灰白色	砂 石・長(1) ○	自然釉	
33	台付盃	口径(13.6) 残高 2.6	「ハ」字状を呈する脚部は斜めに留む。	ナデ	ヨコナデ	淡オーラー色 オリーブ灰 色	砂 石・長(1~2) ○		
34	台付盃	口径(11.2) 残高 2.8	「ハ」字状を呈する脚部は平らな凹をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 灰 色	砂 石・長(1~2) ○		
35	台付盃	口径(12.2) 残高 2.3	「ハ」字状を呈する脚部の内側面が擦傷する。	ナデ	ヨコナデ	暗褐色 暗黒色	砂 石・長(1~2) ○		
36	盃	口径(25.6) 残高 3.0	外反する口縁部の裏筋はわずかに上方に抵触される。外筋に波状又は瘤を残す。	ナデ	ヨコナデ	灰 色 灰白色	砂 長(1) ○	自然釉	
37	盃	口径(23.4) 残高 3.9	外反する口縁部の裏筋は壓扁され突起味である。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰 色 灰 色	砂 石・長(1) ○	自然釉	
38	盃	口径(18.8) 残高 2.5	外反する口縁部の脚部は記認され丸神をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰 色 灰青色	砂 石・長(1) ○		
39	盃	口径(18.0) 残高 4.4	外反する口縁部に沈縫状の凹みをもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	オリーブ灰 色 オリーブ灰 色	砂 石・長(1) ○		
40	盃	口径(17.0) 残高 3.3	外反する口縁部に沈縫状の凹みをもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 オリーブ灰 色	砂 ○		
41	鉢	口径(15.4) 残高 6.1	内清する脚部に口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。	①ヨコナデ ②脚清き枝 ナデ	②ヨコナデ	同輪ナデ 同輪ナデ	砂 石・長(1) ○		
42	器皿	口径(18.2) 残高 4.4	「ハ」字状の脚部に押部はさらに外反し、円神をもつ。円孔外筋には絞割の擦傷が施される。	ナデ	ヨコナデ	灰オリーブ色 灰白色	砂 石・長(1~4) ○	自然釉	

6.まとめ

弥生時代中期から西日本の瀬戸内海沿岸を中心とする地域に集中して発生する高地性遺跡は、一般的には軍事的な様相を呈するものと考えられている。本遺跡の北西にある丘陵上の標高約100mに位置する秩迹面山遺跡は、平野を見下ろす様に立地し、弥生時代中期後葉から後期中葉までの竪穴式住居址や掘立柱建物址を作り集落であり、高地性遺跡と考えられている。本遺跡は、この秩迹面山遺跡よりも30m程高く、秩迹面山遺跡を一望することができ、双方の集落は同時期に存在していることなどから、集落のつながりについても検討の余地がある。また、本遺跡で検出された遺構や出土した遺物などは、低地性遺跡のものと相違性はみられず、本遺跡は直下の平野部に広がる集落の一員として構成され、松山平野や伊予灘が一望できる眺望性に優れた条件が、立地の最大要因となり、見張りや通信的な役割を担っていたことも考えられる。

本遺跡と周辺の尾根部には、松ヶ谷古墳群として12基の古墳の存在が分布調査により確認されている。このなかでも松ヶ谷1号墳は、本格調査により6世紀末の両袖を伴う横穴式石室構造をもつ古墳であることが判っている。分布調査で松ヶ谷8号墳が本遺跡の西隣で確認されているが、西野町側の試掘調査では未検出であった。しかし、本遺跡の試掘調査の段階で、8号墳推定地の周辺部において、盛り土の残存と考えられる固められた土の痕跡を地山直上で僅かに検出した。そして、申請地の谷部で見つかった積石などから、松ヶ谷8号墳は、果樹園開墾の際に取り壊されたものと考えられる。また、西隣の尾根部にある松ヶ谷2号墳・3号墳の道存は良くないが、残存状況から横穴式石室構造が想定でき、松ヶ谷古墳群における古墳の構造を解明する上での貴重な資料となる。

表採資料を採取した地点は砥部古窯跡群内に位置し、周辺の西野町では窯跡が9基調査されている。地表面の状況だけでは窯の詳しい構造は不明であるが、丘陵裾部の斜面上に構築された窯であり、西大池を中心とする平野部に接した窯跡群とは別に、谷部付近に展開する窯跡群が存在する可能性が考えられる。

今後の周辺調査では、今回検出した溝と南隣に位置する松ヶ谷9号墳とのつながりや、松山平野や伊予灘の島々も眼下に俯瞰できる眺望の豊かな場所に立地する集落の広がりや、周辺地域での丘陵上から平野部にかけて展開する集落との関連性などを検討する必要がある。

【参考文献】

- 森 光晴 1975 「かいなご・松ヶ谷古墳群」 松山市教育委員会
岡田 敏彦 1979 「愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」 愛媛県教育委員会
長井 数秋、岡田 敏彦 1981 「古墳山古墳Ⅰ」愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」 愛媛県教育委員会
西川 貞美、平田 雄子 1988 「西野春日谷遺跡・通谷池2号墳」「えひめ子供の城建設に伴う埋蔵文化財調査報告書」 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
阪本 安光 1991 「大下田古墳群・秩迹面山遺跡群・谷田Ⅳ・VI遺跡(谷田1号・2号窯跡)」「愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」 愛媛県教育委員会
栗田 茂敏 1994 「上野遺跡」「松山市埋蔵文化財調査報告書 第39集」 財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
松山市 1992 「松山市史 第一巻 原始編」 松山市史編集委員会
愛媛県 1991 「愛媛県内古墳一分布調査報告書」 愛媛県教育委員会 芸術・文化財室
1986 「上野遺跡(谷田Ⅱ遺跡)」「愛媛県史 資料編 考古」 愛媛県史編纂委員会
1986 「上塘原遺跡群」「愛媛県史 資料編 考古」 愛媛県史編纂委員会

写 真 図 版

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判で補足している。

使用機材：

カメラ トヨフィールド45A レンズ スーパーアンギュロン 90mm他
アサヒペンタックス67 ペンタックス67 55mm他
ニコンニューFM2 ズームニッコール 28~85mm他
フィルム 白 黒 プラスXパン・ネオパンSS・アクロス
カラー エクタクロームEPP・RDPⅢ・フジカラー100

2. 遺物は、4×5判または6×9判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ トヨビューアー45G・69ロールフィルムホルダー
レンズ ジンマーS 240mmF5.6他
ストロボ コメットCA32・CB2400
スタンド等 トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム 白黒 プラスXパン・ネオパンアクロス

3. 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けているが、一部はカラー紙焼きを印刷原稿とした。

使用機材：

引伸機 ラッキー450MD・90MS
レンズ エル・ニッコール135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙 イルフォードマルチグレードIV RC

4. 製版 写真図版175線
印刷 オフセット印刷
用紙 マットコート135kg
製本 アジロ綴

【参考】『理文写真研究』vol.1~13 『報告書制作ガイド』

[大西朋子]



1. 調査地遠景（北東より）



2. 調査地全景（南より）



1. 調査地全景（北より）



2. 作業状況（北より）



1. A区遺構検出状況（南より）



2. A区遺構検出状況（北より）



1. A区SD1南壁土層（北より）



2. A区台石出土状況（東より）



1. A区遺構完掘状況（北より）



2. A区遺構完掘状況（南より）



1. B区遺構検出状況（南より）



2. B区SK 4 検出状況（東より）



1. B区SK 1・6 検出状況（東より）



2. B区SB 1 検出状況（西より）



1. B区SB 1ベルト土層（北より）



2. B区SB 1焼土・炭検出状況（北西より）



1. B区SB 1 遺物出土状況（東より）



2. B区SB 1 完掘状況（西より）



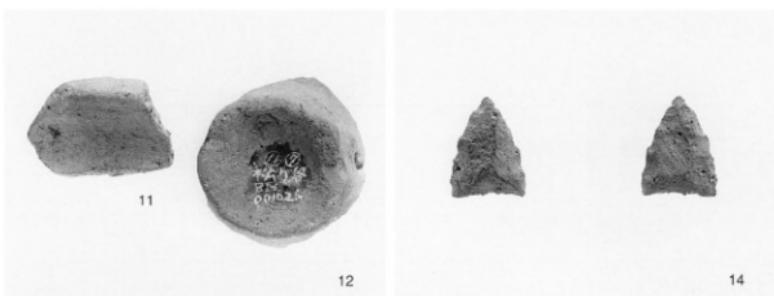
1. B区SB 1 完掘状況（東より）



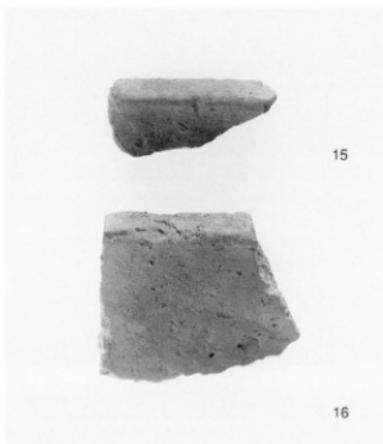
2. 調査地全景（東より）



1. A区第IV層出土遺物



2. B区第IV層出土遺物



3. B区第I層出土遺物



3



5



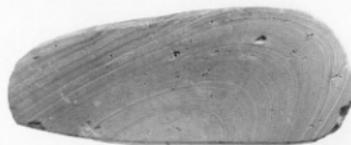
6



9



4



7



8

1. B区SB 1 出土遺物



1. 松ヶ谷古墳群の遠景（北西より）



2. 松ヶ谷古墳群内A地点の石（北より）



1. 松ヶ谷古墳群内A地点の石（北西より）



2. 松ヶ谷古墳群内B地点の石（南西より）



1. 松ヶ谷古墳群内C地点の石（北より）



2. 松ヶ谷古墳群内C地点の石（南西より）



1. 須恵器の採取地（北東より）



2. 表探遺物（東より）

報告書抄録

ふりがな	まつがたにいせき					
書名	松ヶ谷遺跡					
副書名	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業松山南部地区農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書					
卷次						
シリーズ名	松山市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第89集					
編著者名	河野史知・加島次郎・大西朋子					
編集機関	松山市教育委員会・財团法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター					
所在地	市教委:〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 TEL 089-948-6605 埋文:〒791-8032 松山市南原院町乙67-6 TEL 089-923-6363					
発行年月日	西暦 2003年3月7日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積 (m ²)
まつがたにいせき 松ヶ谷遺跡	まつがたにいせき 松山市恵原町	38201	33°45'25"	132°48'32"	20001010～ 20001208	4,623m ² のうち 1,036m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
松ヶ谷遺跡	集落	弥生時代	竪穴式住居址 土坑、柱穴	弥生土器、石器	高地性遺跡	

松山市文化財調査報告書 第89集

松ヶ谷遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業松山南部地区農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成15年3月7日 発行

編 集

松山市教育委員会

発 行

〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1

TEL (089) 948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター

〒791-8032 松山市南薙院町乙67番地6

TEL (089) 923-6363

印 刷

原印刷株式会社

〒790-0056 松山市土居町396-6

TEL (089) 974-8711
